進化系アーカイブと旅するミュージアム

平成29年度 事業報告書

進化系アーカイブと旅するミュージアム事業　平成29年度事業報告書

進化系アーカイブと旅するミュージアム実行委員会

平成29年度文化庁「地域の核となる美術館・博物館支援事業」

＜凡例＞

1．本書は、進化系アーカイブと旅するミュージアム事業について、報告したものである。
2．特に記載がない限り、執筆は進化系アーカイブと旅するミュージアム実行委員会が行った。
3．だんじりは「地車」とも表記されるが、本書では「だんじり」の語で統一をした。
4．デザインについては、森井綾乃が行った。

進化系アーカイブと旅するミュージアム

2017

ちょっとむかしのくらし

進化系アーカイブと

はじめに

平成 27 年 11 月、大東市龍間（経寺地区）のだんじりが解体されました。

そこで、過去に「だんじりを活かした地域共働事業」を通じて、共に被災だんじりのアーカイブ化に取り組んできた経緯もあり、奈良大学博物館・大東市立歴史民俗資料館・同館市民学芸員・大東市が共働し、龍間（経寺地区）だんじりのアーカイブ化と活用に取り組むこととなります。特に、解体されただんじりの部材をクリーニングし、付属する幕などの殺虫処理を行い、文献資料を解読し、計測し、写真撮影し、リストにまとめ、収蔵するという一連の工程を市民学芸員と行うことを特色としています。文化財の専門知識を持たない市民学芸員とアーカイブ化を行うために、必要な専門的な技術や知識は奈良大学の教員から協力を仰ぎました。アーカイブ化の工程を市民学芸員にも理解してもらうことで、今後、他の収蔵資料についてもアーカイブによる公開の可能性が生まれたものと思います。また、アーカイブされた「だんじり」についての情報を市民学芸員と共有できたことで、資料館学芸員だけが管理している情報ではなくなりました。そして、それが何であるという説明ができる人間が複数人存在するということは危機管理の面からも有益なことと考えます。

本事業のもう一つの柱として、アーカイブ化された資料を活用したアウトリーチ事業を試みてきました。資料を後世に伝えていくにあたって、資料の適切な保管・保存と同時に、その資料の価値を広く伝える活動が重要であると考えたからです。そのためには、単なる「出張展示」や「出前講座」ではなく、参加者に博物館ならではの体験を提供する必要があります。高齢者や障がい者、あるいは近くに社寺仏閣といった文化財の乏しいニュータウン地区の学校など、来館や文化財に対するアクセスに制限がある人、場所に「博物館体験」を届ける方法を模索しました。今年度は、地域の企業や団体、他の博物館の学芸員の方、美術科教育の専門家などの協力を経て、トライアルをするにとどまりましたが、様々な立場の方からの意見をお聞きすることができ、今後の方向性が見いだすことができました。

資料のアーカイブ化である「進化系アーカイブ事業」と資料のアウトリーチ活動である「旅するミュージアム事業」は両輪だと考えています。両輪がそろって動きだすのはこれからです。報告書をご高覧いただき、ご指導・ご鞭撻の程をよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、本事業にご協力を賜りましたみなさまに厚くお礼申し上げます。

平成 30 年 3 月 31 日
進化系アーカイブと旅するミュージアム実行委員会

< 趣旨 >

奈良大学博物館の専門性と大東市立歴史民俗資料館の地域性という相互の持ち味を活かし、デジタル・アーカイブの構築とその活用方法としてのモバイルミュージアムの検討を目的とする。大学博物館と連携を図りながら、市民学芸員とともに文化財のアーカイブ化を行う。このことにより市民学芸員を対象とした文化財の保存管理に関する講座を実施し、今後も市民とともにアーカイブ化を進める足掛かりとする。アーカイブ化された資料を活用し、地域の企業や団体とともにモバイルミュージアムを作成する。他分野と連携することで、来館困難者や障がい者に対しても「博物館体験」の提供を可能とする。デジタル・アーカイブは、博物館資料に関する情報だけでなく、モバイルミュージアムにおいて行う博物館資料を活用した「博物館体験」についての情報も公開していく。これによりデジタル・アーカイブがモバイルミュージアムで持ち運べない博物館資料についての情報提供を行い、モバイルミュージアムがデジタルアーカイブを普及させる橋渡しとなり、博物館の保存機能と教育普及機能が連環する仕組みをつくる。

＜組織＞

委 員 長	笠井敏光	大東市立歴史とスポーツふれあいセンター名誉館長
副委員長	坂井秀弥	奈良大学博物館館長
委　　員	小山田宏一	奈良大学教授・奈良大学博物館学芸員
委　　員	藤本悠	奈良大学講師
委　　員	中村義之	大東市立歴史民俗資料館市民学芸員連絡会会長
監　　事	黒田淳	大東市教育委員会生涯学習課参事
事務局長	小西立也	大東市立歴史とスポーツふれあいセンター副館長
事務局員	武井二葉	大東市立歴史民俗資料館館長
事務局員	大畑博嗣	大東市立歴史民俗資料館主任学芸員
事務局員	河島明子	大東市立歴史民俗資料館学芸員
事務局員	甲斐規予子	大東市立歴史民俗資料館学芸員

進化系アーカイブと旅するミュージアム

資料の収集から殺虫処理、クリーニング、調査に至るまでの過程で得られた情報を「現場」で記録していく「進化系アーカイブ」

アーカイブが完了した資料を館外で展示・教育普及し、アーカイブと資料の活用のあり方を問う「旅するミュージアム」

平成 29 年「よみがえれ！だんじりの龍」展展示パネルより

事業概要

デジタル・アーカイブの構築においては、既に収蔵資料のデジタル・アーカイブとその公開を行っている奈良大学博物館に倣い、大学教員の指導を仰ぎ、市民学芸員と学芸員がだんじりに関わる文献資料、彫り物のデジタル・アーカイブを完成させる。また、市民学芸員がアーカイブを作成する過程で、自身が取り扱った資料について、展示として公開する。

モバイルミュージアムは、市内の明星金属工業株式会社等の製造メーカーとともにキットを開発し、川村義肢株式会社といった障がい者支援を行う企業と連携し、誰もが楽しめるユニバーサルなものとする。これを地域の病院や高齢者施設といった施設において、実証実験を行い、参加者からのヒアリングを行う。

デジタル･アーカイブには､アーカイブ化されただんじりについての情報だけでなく､モバイルミュージアムで展開した「博物館体験」についての情報も公開していく。

目次

凡例

P02-03 はじめに

P04-05 趣旨 / 組織

P06-07 事業概要

P08 目次

第 1 部　進化系アーカイブ

P12-22 第 1 章　だんじりの彫り物の整理とアーカイブ化
甲斐 規予子

P23-25 第 2 章　だんじりの文献史料の整理とアーカイブ化
大畑 博嗣

P26-32 第 3 章　市民も参加できる低コストで新しいデジタル・アーカイブの方法について
藤本 悠 / 堀内 保彦

第 2 部　旅するミュージアム

P36-41 第 1 章　だんじり資料を活用していくために
武井 二葉 / 河島 明子

P42-62 第 2 章　だんじり資料を活用した公開事業
武井 二葉 / 西谷 美紀 / 佐藤 優香 / 河島 明子

第 3 部　展示

P66-69 第 1 章　大東市立歴史民俗資料館での「TATSUMA―くらしとまつり―」展示について
森井 綾乃

P70-73 第 2 章　奈良大学博物館での「よみがえれ！だんじりの龍」展示について

P74-75 まとめ
笠井 敏光

P76 謝辞

第1部　進化系アーカイブ

大学博物館と連携を図りながら、市民学芸員とともに文化財のアーカイブ化を行った。そのために、市民学芸員を対象とした文化財の保存管理に関する講座を実施し、今後も市民とともにアーカイブ化を進める足掛かりとした。

第１章では、市民学芸員とともに行っただんじりの彫り物の整理作業やデジタル・アーカイブの構築について報告する。クリーニングや殺虫処理、写真撮影、計測などの作業を行うだけでなく、市民学芸員とともに大規模館や小規模館などさまざまな多様な館の収蔵庫を見学し、よりよい収蔵環境について検討を重ねた。

第２章では、だんじりの彫り物に付属して収蔵された文献史料について、市民学芸員とともに調査やデジタル・アーカイブ化を行ったことについて報告する。まず、翻刻の作業を行ったのち、展示として成果を報告した。その後、アーカイブするために写真撮影・計測の作業を行った。

第３章では、１章・２章で報告のあったデジタル・アーカイブが、低コストかつ市民学芸員とともに作業を行っていくという特色をもった手法で行われたことを、構築をした側の立場から報告する。

第 1 部　第 1 章
だんじりの彫り物の整理とアーカイブ化

甲斐 規予子
大東市立歴史民俗資料館

1. はじめに

本報告では、昨年度の「だんじりを活かした地域共働事業」において調査を行った、龍間（経寺地区）より寄託されただんじり関係資料のうち、彫物とその他の資料（だんじり幕・太鼓等）について、大東市立歴史民俗資料館（以下、資料館と略す）の市民学芸員と共に行った事業内容を報告する。

2. 資料のクリーニング（前年度報告）

昨年度には、奈良大学文学部文化財学科の魚島純一教授の指導の下、市民学芸員を対象とした資料のクリーニング講習を開催した。市民学芸員は彫物や部材のクリーニングについてのレクチャーを受け、実際に資料のクリーニングを行った（詳細は平成 28 年度報告書[i]参照）。

今年度は、昨年度手を付けられなかった資料 136 点を対象に、クリーニングを行った。クリーニング作業には、京都造形芸術大学歴史遺産学科の学生 7 名が関わった【写真 1】。作業時間については、述べ 21 時間の時間を要した【写真 2】。

3. 資料の殺虫処理

龍間（経寺地区）だんじりの資料の中には、だんじり幕が有り、いずれも虫による食害が発生していた。だんじり幕を観察したところ、生きた虫を発見したため、早急に殺虫処理を行う必要が生じた。虫の食害痕から、文化財害虫[ii]に指定されているヒメカツオブシムシ[iii]の幼虫であることが分かった。そのため、奈良大学文学部文化財学科の魚島純一教授の協力により 9 月 2 日に市民学芸員を対象とした殺虫処理についての講義および殺虫処理を実施していただいた【写真 3】。殺虫処理の方法は大きく分けると、薬剤を使用する方法と、薬剤を使用しない方法の 2 通りがある。今回は薬剤を使用せず、高濃度の二酸化炭素で殺虫する処理法を用いた【写真 4】。

4. 市民学芸員との収蔵庫事例見学

資料のアーカイブ化を行うにあたり、市民学芸員は生物被害や収蔵庫環境についての専門知識を持つ必要がある。そこで今年度は、文化財保存についての講座の受講と並行して、5 月に滋賀県立琵琶湖博物館、7 月に国立民族学博物館、9 月に久多いきいきセンター、10 月に西宮市立郷土資料館の 4 館の収蔵庫見学を行った。以下に、各館の紹介及び、市民学芸員の感想を述べる（敬称略）。

（1）滋賀県立琵琶湖博物館（滋賀県草津市下物町 1091）
実施日：5 月 14 日（日）
目的：収蔵方法
参加人数：16 名

滋賀県立琵琶湖博物館は「湖と人間」というテーマを掲げており、地学や生物の資料と、民俗資料を所蔵している。見学の目的は、膨大な数と種類の民俗資料を所蔵する博物館であるため、様々な民俗資料の収蔵方法について学ぶこ

写真　1. クリーニング作業の様子 /2. クリーニング済の資料 /3. 殺虫処理の講義 /4. 二酸化炭素殺虫処理の実演

とである【写真 5】。民俗資料については、研究や展示を目的とした資料の他に、小学校の授業や回想法などで活用する資料を所蔵している。活用資料は、専用の収蔵庫があり、研究資料とは分けて収蔵している。

・資料の予防保存のための工夫がたくさん施されていた（先端が鋭利なものは保護していたり、不安定な資料を紐で固定したり、棚板に資料が直接触れないように薄葉紙が敷かれていたり、ストッパーを置いたりなど）。（大薗美貴子）
・資料の住所が決まっており、管理タグも付与されていたため、目的の資料が見つけやすい環境であった。（竹元智子）
・活用するための資料と、保存するものを分けて収蔵していたことがよかった。（服部悦子）
・資料整理の考え方がきちんと確立されており、分類、整理、管理が出来ている。（広田美和）
・収蔵に関しての基本を学んだ。資料の保存や、配架・管理方法を見習いたいと思った。（檜垣一美）

（2）国立民族学博物館（大阪府吹田市千里万博公園 10 － 1）
実施日：7 月 10 日（月）
目的：IPM による収蔵庫管理
参加人数：15 名
　国立民族学博物館は、博物館機能と、大学院教育の機能を備えた、文化人類学・民族学の研究機関である。今回は国立民族学博物館で実践している IPM（総合的有害生物管理）活動について学ぶため、見学を行った【写真 6】。

・よかったところは、収蔵庫の清掃をすることと、温湿度計を置き、温湿度の管理をしていること。
虫が入る可能性を減らすために、収蔵庫への出入りをなるべく少なくするような工夫をしている。例えば、移動棚を用い、資料を一度に大量に運搬できるようにしていること。（竹元智子）
・キャスター付きの移動棚を使っていて資料を運んでいたこと。運搬時の危険が減る。
(服部悦子)
・民俗（族）資料では、受け入れ時に資料に付着している虫の死骸や、土等も資料情報として、資料の一部として残すことがあると知った。(平尾和久)

（3）久多いきいきセンター（京都府京都市左京区久多下の町 203）
実施日：9 月 10 日（日）
目的：収蔵展示
参加人数：13 名
　久多いきいきセンターは廃校になった中学校を利用し、高齢者の健康の増進を図るため、健康づくりや地域福祉活動のための施設として設置されている。この施設の 3 階に京都市登録有形民俗文化財「久多の山村生活用具」を収蔵展示し、希望者には公開している【写真 7】。

写真　5. 滋賀県立琵琶湖博物館 /6. 国立民族学博物館 /7. 久多いきいきセンター /8. 西宮市立郷土資料館

・狭い空間の中で、壁面などを利用しており、上手に空間を利用して収蔵展示をしていた。（大薗美貴子）
・棚にすのこを入れて、その上に資料を配架していた。通気性もよく、収蔵展示という点では、見栄えのよい保管方法だった。（竹元智子）
・地域に根差したコミュニティセンターで、地域の文化を少しでも残そうという意気込みを学んだ。（中村義之）
・地域の伝統行事に関する資料の保存、地域独特の生活道具を保存することで、未来に文化を継承することの大切さを学んだ。（檜垣一美）
・市販のスチール棚を活用しているが、スギ材ですのこを自作して敷き、なるべくお金をかけずに資料を守る工夫をされていた。（平尾和久）

（4）西宮市立郷土資料館（兵庫県西宮市川添町 15-26）
実施日：10 月 8 日（日）
目的：収蔵方法
参加人数：8 名
　西宮市立郷土資料館は、西宮地方の出土資料や歴史史料など約 4 万点を所蔵している博物館である。西宮歴史調査団（文化財調査ボランティア）が活発に活動しており、地域の歴史について悉皆調査を行い、その成果を展示や現地説明会、報告書等で発信している。また、年に 1 度活動報告会を開き、西宮歴史調査団の一年間の調査成果を報告している。郷土資料館が設置された建物は、図書館とギャラリーがあり、複合施設である点が当館と似ているため、見学を行った【写真 8】。

・月に 1 度全収蔵庫の清掃をしていて、資料・配架のチェックをしていること。綺麗に配架しているからこそできることだと感じた。（大薗美貴子）
・災害に対していかに保存していくのか、という努力をされていた。（中村義之）
・収蔵庫の見取り図を作り、どこになにがあるのかを管理できるようにしていた（服部悦子）
・色々な制約の中で、今出来ることを工夫して取り組まれていた。（広田美和）

5. 民俗資料を専門とする外部有識者との収蔵庫見学
　専門的な視点から収蔵庫調査を行うため、外部有識者とともに遠方の博物館の収蔵庫調査を行った。各館では、主に民俗資料専用の収蔵と教育プログラムに重点を置き、館員からの説明を受けた。

（1）大韓民国における博物館視察
実施日：9 月 6 日（水）～ 8 日（金）
目的：収蔵方法、デジタル・アーカイブ、教育プログラム
参加者：伊達仁美氏 *、大井理恵氏 **、筆者

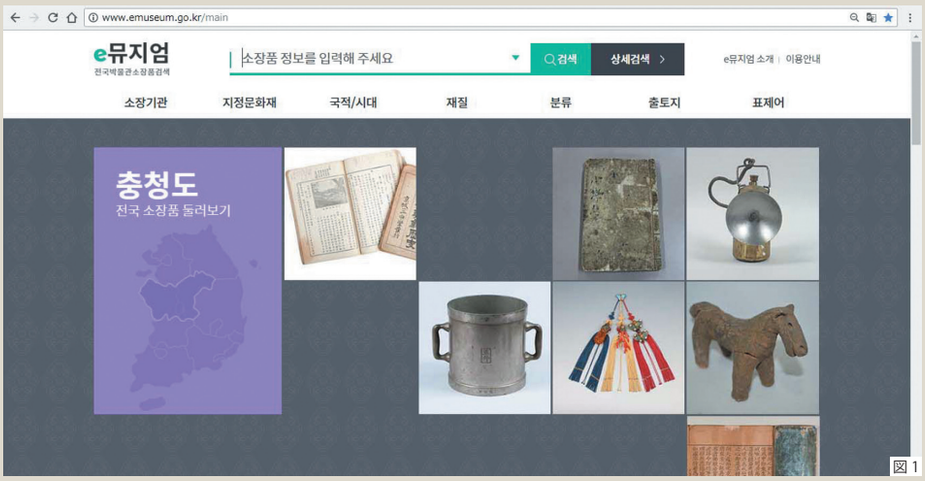
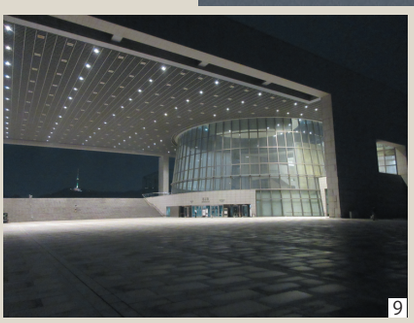


図 1



9

写真　9. 大韓民国国立中央博物館　　図 1　e ミュージアム（大韓民国国立中央博物館 HP より引用）

①国立中央博物館（大韓民国ソウル特別市龍山区西氷庫路 137）

国立中央博物館は、大韓民国文化体育観光部の管理下にある博物館である【写真 9】。ここでは、国内の出土遺物から近代の民俗資料まで、あらゆる種類の資料を所蔵しており、特に陶磁器については 7 万点もの資料を所蔵している。施設は本館と教育館に分かれており、今回は本館内の収蔵庫の見学及び、保存科学部の職員と、教育普及担当職員から館内での業務について話を伺うことができた。収蔵庫は数が多いため、今回はこちらの要望で、紙、木、土製品の収蔵庫に絞り見学した。

館内の収蔵庫は、全部で 19 室あり、材質別に部屋が分けられており、紙、鉄、木製品の収蔵庫は壁面が木材の仕様になっている。館の中には保存科学部があり、材質ごとの専門に分かれた職員が配属されている。紙、木製品の収蔵庫内の空調は、湿度 50～60%という温湿度環境であった。

IPM（総合的有害生物管理）活動については、天然の成分で出来た殺虫剤を中央博物館で開発しており、他の国立博物館にもこの殺虫剤を提供している。

デジタル・アーカイブについては、e ミュージアム[iv]（文化遺産標準管理遺物システム）を用い、韓国国内に設置されている国立の博物館の資料情報は、すべてこのシステムに統合されている【図 1】。

収蔵庫のツアープログラムを 2016 年から始めている。このツアーは一般来館者を対象にした収蔵庫見学である。そのためどこまで立ち入りを可能とするか、教育普及担当者と遺物管理部の間で、許容範囲を検討した。その結果、陶器類の収蔵庫に限り、前室までの立ち入りを許可した。参加者は各回 15 ～ 20 名が定員で、年 4 ～ 6 回の開催、スタッフは、毎回 4 ～ 6 名で対応している。バックヤードツアーの流れとしては、まず、館内における業務の様子を紹介する映像に職員が登場し、上映後にその職員が実際に参加者の前に現れ、バックヤードを案内するという演出をしている。すると、映像に出ていた人と同じであると、参加者が認知し、解説に集中するという効果があった。

他には職業体験のプログラムがあり、資料の調書取りや梱包作業など、博物館で働いている職員の仕事を体験することができるようになっている。このプログラム用のワークシートは、博物館の公式サイトからダウンロードが可能である。職員が普段使っている資料調査票を元にしたワークシートになっており、対象は、小学 5 年生から高校生までとしている。

②国立全州博物館（大韓民国全羅北道全州市完山区スッコゲ路 249）

国立全州博物館は、国立中央博物館と同様大韓民国文化体育観光部の管理下にある博物館である【写真 10】。全州は、朝鮮王朝の発祥の地であり、韓紙の生産、出版や伝統工芸が盛んな地域である。国立全州博物館は全羅北道の歴史をテーマとした博物館で、所蔵している資料も全羅北道

10

11

12

写真　10. 大韓民国国立全州博物館 /11. こども博物館 /12. 弓矢を使った狩りをするゲーム

で出土、収集したものである。また、本館の他に子ども博物館も運営している【写真 11】。この子ども博物館は 2014 年のオープン以来、15 万人が来場しており、その半数が子どもである。今回は本館内の保存科学室と民俗収蔵庫、子ども博物館の視察を行った。2002 年 11 月に設立された保存科学室には資料の保存処理担当が 3 名おり、材質にあわせた保存処理や環境管理を行っている。

民俗収蔵庫は、天井と壁の全てが桐材を用いた仕様になっており、柱には衝撃に強いマツを選定している。床部分は、資料の移動などで傷がつきやすいことからカエデを使用している。資料の収蔵方法については、掛け軸等は薄葉紙で包み桐箱に収蔵されている。屏風は、スライド式の収蔵棚に立てて配置し、1 点ずつ特注の袋に入れて保管され、埃をかぶらないように工夫していた。綿布で大きさに合わせて製作し、ファスナーを取り付け出し入れしやすい仕様になっている。

子ども博物館のコンセプトは、子どもたちに朝鮮王朝の文化を体験させることである。展示の対象は子どもに絞っているため、未就学児童でも遊びながら、楽しく学ぶことのできる仕組みになっている。簡単なゲーム性のあるコンテンツなどを用いて学習効果を高めている【写真 12】。

③国立民俗博物館（大韓民国ソウル特別市 鍾路区 三清洞 37）

大韓民国国立民俗博物館は、国立中央博物館、国立全州博物館と同様大韓民国文化体育観光部の管理下にある博物館である【写真 13】。先史時代から現代に至るまでの韓民族の生活関連資料を所蔵し展示している博物館である。また、子ども博物館も同じ敷地内に常設され、野外には住居の模型展示がある。

国立民俗博物館には、16 室の収蔵庫がある（15 室は本館内にあるが、 1 室は館外に別置されている）。当初は用途別に資料を分類して収蔵していたが、2012 年から収蔵庫を再編成し、用途別ではなく、材質別に分けることになった。今回は、木製品、布製品、民俗資料の収蔵庫を見学した。1 年に 4500 点ほどの新規資料を受け入れており、資料の登録作業には 30 人の職員が携わっている。

収蔵庫の管理については、遺物科学部の職員が IPM（総合的有害生物管理）活動の担当になり、実施している。収蔵庫内の清掃は、収蔵庫専門の清掃業者に委託している。温湿度は、木製品、布製品、民俗資料の収蔵庫においては温度 20℃± 4℃、湿度 50% RH ± 5% RH に設定している。

資料の受入については、収蔵庫スペースの関係上、検討した上で必要だと判断したもののみとしている。収蔵スペースが不足しているという点は、当館と同じ課題を抱えていることがわかった。

収蔵庫見学の後、デジタル・アーカイブ担当の職員からお話を伺った。国立民俗博物館で管理しているデジタル・アーカイブは、内部利用と外部利用に大きく 2 つに分けることができる。内部利用は、広報や展示に利用されるもの

13

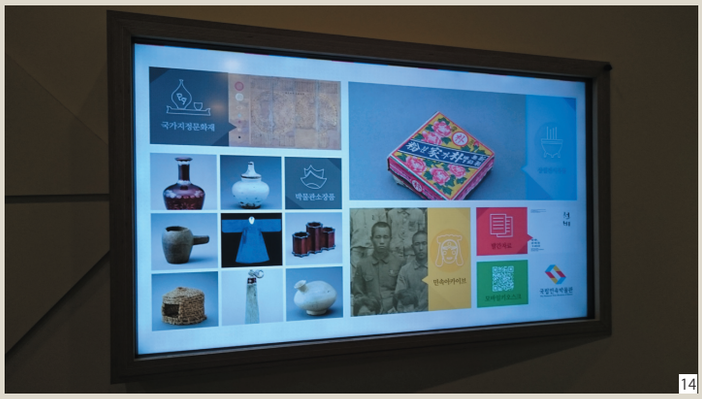

14

写真　13. 大韓民国国立民俗博物館 /14. 館内に設置された、資料データベース

である。例として、とある写真家から作品を寄贈された際に、そのアーカイブ化を行い、写真展を開催し、図録を作成、さらにインターネット上での公開を行ったことがあった。もう一つは外部からの依頼による利用で、本の出版や商業的なイメージ使用、カレンダー作成などで利用されることが多い。研究者の利用もこれに当たる。国立民俗博物館では、展示の際に作成した資料もすべてデジタル・アーカイブ化して記録を残している。部署ごとに展示に使用した資料をまとめ、それをアーカイブ担当でチェックした上で情報を統合し、保存している。2017 年には、館内の資料データベースでは、すべてのデジタル・アーカイブをインターネットで公開した【写真 14】。画像、基本データ、文献、図録などすべての関連情報を統合している。これらのデジタル・アーカイブを、4 年の歳月をかけて完成させている。当館でも、開催した企画展などの展示プロセスの記録について課題となっているため、このシステムを参考にして今後取り入れていきたい。
【写真 13】大韓民国国立民俗博物館
【写真 14】館内に設置された、資料データベース

（2）砺波民具展示室（富山県砺波市頼成 566）
実施日：10 月 13 日（金）
目的：収蔵展示
参加者：伊達仁美氏 *、大井理恵氏 **、筆者
　砺波民具展示室は、平成 29 年 3 月に国指定となった重要有形民俗文化財「砺波の生活・生産用具」の資料群を収蔵展示するために砺波市が設置した施設である。砺波民具展示室の管理には、砺波郷土資料館の職員があたっている。約 7，500 点の民具が、それぞれ農具、チューリップ栽培、衣食住、社会生活、手工業といった用途で分類され、公開されている。子供たちが現在も通う砺波市立庄東小学校 3 階のフロアが収蔵施設になっていることが特徴である【写真 15】。廃校になった小学校施設を利用するのではなく、「生きた小学校」の中に博物館を設置することにこだわりがあったため、現在の形となった。但し、民具展示室は独立した出入り口が設置されている。小学校 3 年生における社会科の「むかしのくらし」の単元の授業などで、小学生が活用している。
　展示室の中で最も広い、農具の展示室には、砺波地方で収集した米つくりの農具が米つくりの工程順で並べられており、展示室の中央に立つとそれらが一望出来るよう設計されている【写真 16】。特に除草機が多く所蔵され、資料に合わせて製作された木製の台に架けられるようになっている。メーカー毎に製作時期の順番で並べられており、除草機の改良の変遷がわかる。当館も除草機を大量に所蔵しているため、このアイデアは大変参考になった【写真 17】。
　また、鋸や鎌など、刃があるものは、来館者が触れてけがをしないように、上から透明のビニールシートで覆い、刃先が出ないように収蔵用の棚にネットを張り、見学者が直接触れることがないように工夫されている。

15

16

17

写真　15. 砺波民具展示室 /16. 農具展示室 /17. 特注の台に除草機を吊るして保管している

（3）北海道における博物館視察
実施日：11 月 24 日（金）～ 11 月 26 日 (日)
目的：収蔵方法、デジタル・アーカイブ、教育プログラム、ボランティア
参加者：伊達仁美氏 *、大井理恵氏 **、筆者

①北海道博物館（北海道札幌市厚別区厚別町小野幌 53-2）
　北海道博物館は、北海道開拓記念館（1971 年開館）と道立アイヌ民族文化研究センター（1994 年開所）の 2 つの道立施設を統合して 2015 年 4 月に新たに開設された博物館である【写真 18】。北海道の自然・歴史・文化にまつわる資料を所蔵する総合博物館であり、今回は民俗収蔵庫と、保存処理室などの見学を行った。
　まずバックヤードの視察では、どの部屋も整理整頓が行き届いていた。IPM（総合的有害生物管理）活動に積極的で、その一環で整理整頓に取り組まれ、職員全体で周知するまでには何年もかかったとのことだった。虫が館内に入り込まないよう、侵入口となる場所や、隙間などをすべて埋めていた。収蔵庫は毎日目視点検を行い、各所へ設置しているデータロガーの点検についても機械だけに頼らず、職員の目で確認している。
　民俗収蔵庫は 2 つあり、大型資料が配架されている収蔵庫には、バックヤードツアーの際に一般来館者も立ち入りを許可している。民俗収蔵庫も整理が行き届いており、用途別に分類され配架されていた。
　次に教育普及については、北海道博物館では、出前授業は行っていないが、小学校などの団体見学のために、「はっけんプログラム」という教育プログラムを充実させている。博物館が発行している「学校利用ガイド」には、校外学習計画を立てることから、事後学習までの流れの説明が入っており、学校の教師が利用しやすいように隅々まで配慮されている。また、博物館の地下には「はっけん広場」という部屋があり、ここでは来館者が年齢を問わず、さまざまな体験ができる。部屋の棚には「はっけんキット」という道具箱が 40 種類ならんでおり、自由にとりだして体験できるようになっていた。中にはクイズ形式で、子どもの興味を引き出すように工夫されていたものもある【写真 19】。
　デジタル・アーカイブの利用に関しては、早稲田システム開発株式会社が開発した、収蔵品管理システム I.B.MUSEUM を利用し、データベースを運用している。データベースへの資料登録は、その新規資料受入を担当した研究員が登録処理を行う。端末は収蔵庫に 2 台、研究室に 1 台、情報室に 1 台あり、一部はホームページで検索が可能である。また、「ポケット学芸員」というスマートフォン用のアプリを導入しており、これは現在 5 か国の言語に対応している。展示資料のキャプションに記載されている番号をこのアプリに入力すると、資料情報が表示され、閲覧が出来るというアプリである。これは、番号さえ控えていれば、博物館外でも閲覧することが可能である。当館でも今後、デジタル・アーカイブをスマートフォン用のアプリを用い

18

19

写真　18. 北海道博物館 /19. はっけんキット

て活用するということも検討したい。

②小樽市総合博物館・運河館（小樽市手宮 1 丁目 3 番 6 号）

小樽市総合博物館は、平成 19 年 7 月、旧小樽交通記念館に小樽市博物館と小樽市青少年科学技術館の機能を統合し、開館した博物館である【写真 20】。小樽市の歴史と自然、北海道の交通史、科学技術をテーマに、さまざまな活動を行っており、鉄道に関しては 50 両もの蒸気機関車を保管している。施設は本館（旧小樽交通記念館小樽市手宮 1 丁目）と運河館（旧小樽市博物館小樽市色内 2 丁目）の二つがある。

小樽市総合博物館では、特にボランティアによる活動が充実しており、今回はそれを重点におき、お話を伺った。平成 19 年度からボランティア制度を導入し、平成 28 年の時点では合計 100 名の登録者がいる。活動は 8 つの分野に分かれ、それぞれがテーマに沿った活動を行っている。登録者はみな意欲的で、活動への参加率が非常に高いことが小樽市総合博物館ボランティアの特徴である。活動内容としては、解説、化学、環境、自然、鉄道、無線、歴史、イベントがあり、各分野に担当学芸員が付いている。また、登録者は 29 歳以下の若年層も多く、その理由は活動分野が広いため、参加しやすいことが挙げられる。鉄道分野の活動は、人気があるため道外から来る人が多く、遠方からも参加しやすいように 8 月など夏休み期間だけの活動にしている。また、イベントの情報を事前に告知すること、出欠を取らず自由度を高めていること、勉強会の開催など生涯学習としての側面をもたせていることなど、登録者の視点に立って色々と工夫しており、当館も市民学芸員と共に行う今後の活動の参考としたい。

デジタル・アーカイブ化については、館内資料の 9 割が終了している。資料情報の打ち込み作業や、写真のスキャニングを中学生の職業体験にも取り入れている。本館内には所蔵資料のデータベースを検索出来るコーナーがあり、来館者が資料の写真や情報を閲覧できるようにしている。

（4）奄美大島における博物館視察

実施日：2018 年 1 月 30 日（火）～ 2 月 1 日（木）

目的：教育プログラム

参加者：伊達仁美氏 *、笠井敏光、大畑博嗣、筆者

①瀬戸内町立図書館・郷土館 （鹿児島県大島郡瀬戸内町古仁屋 1283-17）

瀬戸内町立図書館・郷土館は、奄美群島における生息する動植物や、瀬戸内町で出土・収集した資料を所蔵・展示する博物館である。郷土資料館が設置された建物は、図書館と複合施設である。

教育プログラムについては、瀬戸内町内の小中学校による団体見学の対応が多い。しかし、島嶼部等、移動手段の関係で団体での来館が難しい学校のために出前授業を行うことも多い。出前授業の際は、奄美の民具である「ティル」という竹製の運搬具に授業で使う資料を入れて持っていく。

写真　20. 小樽市総合博物館

集落ごとに文化が異なるため、それぞれの校区で話の内容を変えている。「昔の道具を調べよう」という課題を設定し、現在子どもたちが使用している道具と、昔の道具を比べることで、今と昔を結び付けることが出来るように意識している。また、子どもを対象とした自然講座が毎年開催され、小学校 5 ～ 6 年生が 20 名程度参加する。

②奄美市立奄美博物館 （鹿児島県奄美市名瀬長浜町 517）

奄美市立奄美博物館は、奄美における人文科学・自然科学の分野の資料を所蔵し、展示している博物館である。「黒潮の流れに生きる」を展示の基本テーマとして、導入展示（1 階）・人文系展示（2 階）・自然科学系展示（3 階）・野外展示・企画展示を柱としている。

教育プログラムについては、瀬戸内町と同様出前授業を行うことが多い。出前授業の内容は、校区に対象を絞り、その地域の文化についての話をするが、最近は自然分野の講義の要望も出てきた。また、方言の継承について問題視し、取り組みを行っている。子どもたちが、方言を話せないため、豊年祭や敬老会などで地域のお年寄りとコミュニケーションを図る中で、簡単な挨拶などで方言を積極的に使おう、と呼びかけている。

展示の解説では、木製の船について木の年輪の話をし、理科の内容に結びつける。身近な生活と、今子どもたちが取り組んでいる勉強の内容を結び付けるように意識されている。

5. 市民学芸員との整理作業（成果報告）

2018 年 1 月と 2 月はデジタルアーカイブの構築に向けて、資料のクリーニングが終了したものに対して、彫物やだんじり幕の写真撮影を市民学芸員と共に行った。太鼓や飾り金具なども彫物と共に含めて、142 点すべてを撮影した。撮影作業は、特定非営利活動法人フィールド代表理事の堀内保彦氏のご指導をいただきながら進めた。撮影に使用した機材や撮影方法などの詳細な情報に関しては、奈良大学文学部地理学科専任講師の藤本悠氏の報告に委ねるが、ここでは撮影時に市民学芸員がどういった作業を行ったのかを報告する。　市民学芸員は、1. 資料を保管場所から撮影場所まで運搬する、2. 資料を撮影場所へ設置、3. カメラのシャッターを押す、4. 撮影が済んだ資料の寸法計測、5. 劣化により脆弱になっている資料や、部品が外れる資料を薄葉紙で作った紐で固定、6. 資料を撮影場所から保管場所まで戻すという、6 つに役割分担し作業を行った【写真 21】。撮影に要した作業時間は、撮影のセッティングを含むと述べ 20 時間ほどであるが、撮影のみの作業であれば約 12 時間程度で 142 点の資料を撮影することができた【写真 22】。今後は、藤本氏が作成したシステムに今回撮影した写真と目録のデータを入力し、インターネット上で公開を予定している。

6. おわりに

今回の進化系アーカイブと旅するミュージアム事業の活

写真　21. 撮影の様子

動では、市民学芸員とともにだんじりのデジタル・アーカイブ化及び資料の整理、外部有識者とは、デジタル・アーカイブの構築及び博物館の教育システムを中心に視察を行った。

滋賀県立琵琶湖博物館や国立民族学博物館の場合は極力収蔵庫への出入りを制限し、外部から虫が侵入しないように気を配っていた。一方で、久多いきいきセンターや砺波民具展示室の場合は収蔵展示を目的としているため、来館者の動線に気を配り配架したり、人が資料に触ることを前提として、来館者がけがをしないように気を配ったりしていた。西宮市立郷土資料館は、災害が起きた場合を想定し、収蔵庫前室の扉を丈夫なものに替えるなど、それぞれの館の持つ基本理念に合わせ、資料の保存と活用についての捉え方も様々であるということがわかった。

大韓民国の博物館では、訪問した 3 館がともに資料保存のため IPM を取り入れており、保存担当者だけではなく、全職員に周知されていた。また、子供向けプログラムも充実しており、ゲーム感覚で学ぶことができるようにしていた。デジタル・アーカイブについても早い時期から取り入れるなど、利用者へのサービスが行われている。

北海道博物館は IPM に積極的で、虫の侵入口を徹底的に洗い出し、収蔵庫に限らず、普段から整理整頓を心がけていた。学芸員等の専門職員のみならず、一般職員にも周知されていた。教育プログラムにも力を入れている。小樽市総合博物館ではボランティア活動が活発で、分野も 8 種類と多く、登録者の参加率が非常に高い。

瀬戸内町立図書館・郷土館と奄美市立奄美博物館では、出前授業が多く、それぞれの地域ごとに文化がちがうため、それに合わせて授業での話題を変えている。また、奄美市立奄美博物館では方言の継承について、博物館が問題提起し、呼びかけを行っている。

以上、市民学芸員との活動の中では、他館の視察を行い、どの館も共通して民俗資料の収蔵スペースが足りないという問題と、それぞれの館が行っている収蔵の工夫について知見を得た。また、外部有識者との視察の中では、デジタル・アーカイブや教育プログラムについて、各館の意欲的な取り組みについて理解を深めることができた。このたびの視察にご協力をいただいた機関とは、今後も交流を続けていきたい。

謝辞

このたびの事業遂行、視察を行うにあたりまして、以下の皆様に、ご指導ならびにご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。（事業順）

渡部圭一氏／三桝友梨香氏（滋賀県立琵琶湖博物館）、西澤昌樹氏／小関万緒氏（国立民族学博物館）、岡田芳治氏（久多自治振興会会長）、福持昌之氏（京都市文化財保護課）、俵谷和子氏／西尾嘉美氏（西宮市立郷土資料館）、崔興鮮氏／權赫山氏／元今玉氏（大韓民国国立中央博物館）、金承熙

写真　22. 撮影した彫物

氏／李永範氏／金恩榮氏（大韓民国国立全州博物館）、權善榮氏／金炯周氏（大韓民国国立民俗博物館）、高原徹氏／齊藤恵子氏（砺波市立砺波郷土資料館）、水島未記氏／山際秀紀氏／圓谷昂史氏（北海道博物館）、石川直章氏／菅原慶郎氏（小樽市総合博物館）、町健次郎氏（瀬戸内町立図書館・郷土館）、久伸博氏（奄美市立奄美博物館）、原野耕三氏／福原凡香氏（原野農芸博物館）、朴眞美氏（大韓民国通訳者）今村栞氏／佐々木麻衣氏／甲斐晴菜氏／清彩華氏／堀岡奈央氏／百瀬さくら氏／山本千都氏（京都造形芸術大学歴史遺産学科）
堀内保彦氏（特定非営利活動法人フィールド）、宮元正博氏（池田市立歴史民俗資料館）、青木滉太氏（同志社大学大学院）

*…伊達仁美氏（京都造形芸術大学教授）
**…大井理恵氏（石川県立歴史博物館学芸主任）

1　『だんじりを活かした地域共働事業実行委員会報告書Ⅲ』、だんじりを活かした地域共働事業実行委員会、2017
2　博物館や美術館などに収蔵される古文書・美術資料などの文化財は多くが紙や木、布などの有機質材料でできているため、虫害による損傷が発生する。文化財への虫損を及ぼす害虫は文化財害虫と呼ばれる。
3　コウチュウ目　カツオブシムシ科 幼虫は羊毛や絹などの衣類を食害する。
4　e ミュージアムの URL：http://www.emuseum.go.kr/main

第 1 部　第 2 章
だんじりの文献史料の整理とアーカイブ化

大畑　博嗣
大東市立歴史民俗資料館

1. はじめに

本報告では、昨年度の「だんじりを活かした地域共働事業」において調査を行った、龍間（経寺地区）より預かっただんじり関係資料のうち、古文書について、大東市立歴史民俗資料館（以下、資料館と略す）の市民学芸員と共に行ってきた事業について、報告を行う。

2. 市民学芸員との翻刻作業

まずは、市民学芸員と共に今回の翻刻作業を実施した経緯から触れていく。

資料館において、2014 年度特別展「野崎専応寺」を開催するにあたり、専応寺より調査のため法宝物類と共に、使用していない襖を預かり、下張り調査の依頼を受けた。その時に市民学芸員の中で、古文書に興味を持つ有志を募り、古文書講座と並行して下張りを剥がす作業を行っていった。その後、2016 年度特別展「よみがえる平野屋新田会所」に向けても、平野屋新田会所より持ち帰った襖の下張り調査を市民学芸員有志と共に行った経緯がある。

このような作業を受けて、昨年度の「だんじりを活かした地域共働事業」において、調査を行った龍間・経寺地区より預かった古文書群 74 点について、10 月に開催した展示「TATSUMA―くらしとまつり―」へ出品するため、またデジタルアーカイブへの掲載を目的に、作業日を各月の第 2・4 水曜日と定めて、市民学芸員と共に翻刻作業を行った。

まずは、史料に書かれている文字に慣れるために、昨年度筆者が作成した史料の調査カードを参照しながら、史料の作成者や年代といった情報が間違わずにカードへ記入されているかなど確認作業を行い、終了した後に翻刻を開始した。翻刻作業は、古文書に興味があるが解読できない方が多いので、史料 1 点に付き 2 人で作業を行うようにし、原稿用紙を利用し、１マスに１字を記入してもらうように作業を進めた【写真 1-2】。また、作業中には、筆者が作業場所に同席し、解読できない文字があれば解読しているが、各人でも文字を解読できるように『くずし字解読辞典』や『くずし字用例辞典』の使い方をレクチャーしながら作業を行っていった。

作業の進捗状況としては、2018 年 1 月末現在、全 74 点中 26 点が翻刻を終了しており、9 点が翻刻途中である。

3. 市民学芸員との展示作業

8 月第 4 週と 9 月第 2 週の作業日に「TATSUMA―くらしとまつり―」展に向けて、展示史料の解説文作成を行った。

出品史料の選定については、筆者からは特に指定せず、それぞれのペアで翻刻を行った史料の内、作業中に興味を持ったものや来館した方へ見てもらいたいものを中心に選んでもらい、それぞれの史料について 200 字程度の解説文を作成した。次の作業日には、作成した解説文を参加者全員で通読し、誤字・脱字などがないか確認を行いながら、どの漢字にルビを付すのかなど検討を行った。そして 9 月第 4 週の作業日には解説文と史料翻刻のパネル化の作業を

写真　1-2. 翻刻作業風景 /3-4. 展示作業風景

行い、展示室に配置した展示ケースの中に史料を入れ、作業は終了した。【写真 3-4】

出品した史料は、筆者が選定した 2 点を含めて 12 点に及んだが、各ペア 1 点選定してもらい、多いところでは 3 点も出品していた。しかしながら、出品史料はだんじりの建築費に関する記録といっただんじりに関わる史料と、青年団の名簿などだんじり以外の史料と 2 種類の史料が多かったため、テーマを 2 つ設けて展示を行った。

4. 他館の事例見学

上記の作業を行いながら、市民による蔵書の修復作業を行っている西尾市立岩瀬文庫と、今後のアーカイブの運用方法や史料公開のルールを参考とするため、山口県文書館への視察を行った。

（1）西尾市立岩瀬文庫

11 月 17 日（金）に愛知県西尾市にある西尾市立岩瀬文庫へ視察を行った【写真 5】。

岩瀬文庫では、市内もしくは近隣市在住で岩瀬文庫に興味があり、継続的に活動を行える方にボランティアとして登録を行っている。年齢層として 10 ～ 60 代で、29 年 4 月現在で 64 名の方が活動を行っている。活動としては、和綴じ本の綴じ糸の取り替えや保存箱の組み立てを行う「保存活動」、講座の受け付けや会場設営、体験講座のアシスタントを行う「講座サポート」、展示のポスター・チラシの発送作業を行う「宣伝活動」、毎年 10 月に開催される「にしお本まつり」の企画・運営を行う「イベント活動」という 4 つの活動を行っていることを聞き、それぞれの活動について詳しくお教え頂いた。特に「保存活動」と「講座サポート」については、市民学芸員の活動と重なることが多くあったので、参考となるところが大きかった。

（2）山口県文書館

12 月 22 日（金）には、外部有識者の岡村喜史氏（大東市史編纂委員）と当館の森井綾乃と筆者で山口県文書館へ視察を行った【写真 6】。

山口県文書館では、旧萩藩主毛利家より寄託された萩藩の記録や、明治以降の山口県の行政文書などを収蔵している。また、全国的に見ても早い時期の平成 15 年からインターネット上でデジタル・アーカイブを公開・運用をしており、多くの古文書や絵図類といった所蔵史料を公開している。今回、アーカイブで史料を公開するにあたり、どういった基準で史料を公開しているのかといった運用方法をお教え頂いた。さらに、資料館で今後、市内の寺社や民家より古文書や民具といった史資料を収集するために、文書館が行っている「地域資料保存の取り組み」についてお話を伺った。これに加え、収蔵庫を案内頂き、貴重な史料がどのように保存・管理されているのかも拝見することが出来、参考にすべき点が多く感じられた。

写真　5. 岩瀬文庫外観 /6. 山口県文書館外観 /7-8. 今回撮影した史料

5. 市民学芸員とのアーカイブ化作業

展示の終了後、2018 年 1 月と 2 月の作業日にはアーカイブ化に向けて、史料の写真撮影を市民学芸員と共に行った。撮影は 74 点すべて実施したが、全丁ではなく、墨付きの箇所（文字が書かれている丁）のみを撮影した。

撮影には、特定非営利活動法人フィールド代表理事の堀内保彦氏に協力を頂き、堀内氏に指導を仰ぎつつ撮影を行った。撮影に使用した機材や撮影方法などの詳細な情報に関しては、藤本悠氏の報告に委ねるが、ここでは撮影時に市民学芸員がどういった作業を行ったのかを報告する。

撮影初日は、カメラ 1 台で撮影を行い、堀内氏とアシスタントの学生が機材の設置と撮影を行った。市民学芸員は、撮影する史料を撮影台に置く、丁めくり、どの史料を撮影したのか目録との照合、撮影前の史料についた折りしわを伸ばす役目と 4 つの分担を決めて作業を行った。しかし、2 回目の撮影では、積極的に作業へ参加してもらうために、カメラを 2 台に増やし、上記の分担以外に、シャッターを切る役目も増やして作業を行った。

1 月の作業が終了した時点では、74 点中 58 点が撮影を終了している。2 月の作業日にも撮影を行い、全史料の撮影を終了する予定になっている。その後、藤本氏が作成したシステムに今回撮影した写真と目録のデータを入力し、インターネット上で公開を予定している。

（追記

今回、視察を行うにあたり、神尾愛子氏（西尾市教育委員会文化振興課　市史編さん室主査）、金谷匡人氏（山口県文書館副館長）からご教示を頂いた。厚く御礼を申し上げたい。

第 1 部　第 3 章

市民も参加できる低コストで新しいデジタル・アーカイブの方法について

藤本 悠　　堀内 保彦
奈良大学文学部地理学科　特定非営利活動法人フィールド

1. はじめに

従来のデジタル・アーカイブの手法は主として高精度、高品質を追求する傾向にあり、金銭的なコストには十分に注意が向けられてこなかった。デジタル・アーカイブに関する取り組みが高級路線に方向づけられた背景には、各種のデジタル機器とその関連機材が性能に対して価格が高かったという側面と、デジタル化の対象とされてきた資料そのものの価値が高かったという側面とがある。特に、前者はデジタル・アーカイブの実施におけるボトルネックとされ、大規模な予算を組むことができる大規模な機関や新規的な実験を目的とする一部の研究機関しか実施することができなかった。

この問題によって、現在においても、特に地方の中小の博物館や美術館、図書館、資料館などはデジタル・アーカイブの取り組みに対して距離を置かざるを得ない状況にある。そうした状況にあるにも関わらず、人口減少と少子高齢化の問題が愈々加速しつつある中で、膨大な伝統的な地域コミュニティの記録をデジタル・アーカイブとして記録・保存する必要が議論されはじめている。

実際に、本事業におけるデジタル・アーカイブはまさにそうした必要によって始められた。地域コミュニティの崩壊によってだんじりとその関連資料の維持管理が困難となっていることはやむを得ない状況にあるが、少なくとも、デジタル・データとして後世に記録を残す必要がある。ところが、大東市立歴史民俗資料館には既往の手法によるデジタル・アーカイブ構築を行うための十分な機材も人材も揃ってはいなかった。

確かに、近年では各種デジタル機器の性能が飛躍的に向上する一方で価格は現実的な水準となっているため、低予算なデジタル・アーカイブの可能性が見え始めている。しかしながら、現実には高級な機材を用いたデジタル・アーカイブ手法がデファクトとして定着しつつあることに加えて、運用ワークフローが整理されていないという問題や、低コストなデジタル・アーカイブを構築するための安価な支援システムが存在していないといった問題があって、実用段階には至ってはいない。一般に普及した民生機器を使用した体系的な運用モデルを構築しつつ、許容できる精度と品質を実現できる手法を考案しなければ、根本的な解決は望めない。

これらの理由から奈良大学文学部地理学科の藤本研究室と特定非営利活動法人フィールド (以下、NPO フィールド) は継続的に低コストで新しいデジタル・アーカイブ手法とシステムの開発を進めている。本年度の事業では関連する他のプロジェクトでの成果を踏まえた上で関連資料のデジタル・アーカイブ構築を行った。本稿においてはその具体的な事業内容について報告を行う。

2. デジタル・アーカイブにおけるコストの問題

コスト面から見たデジタル・アーカイブ手法の検討は学界としても十分に注意が払われているとは言えな

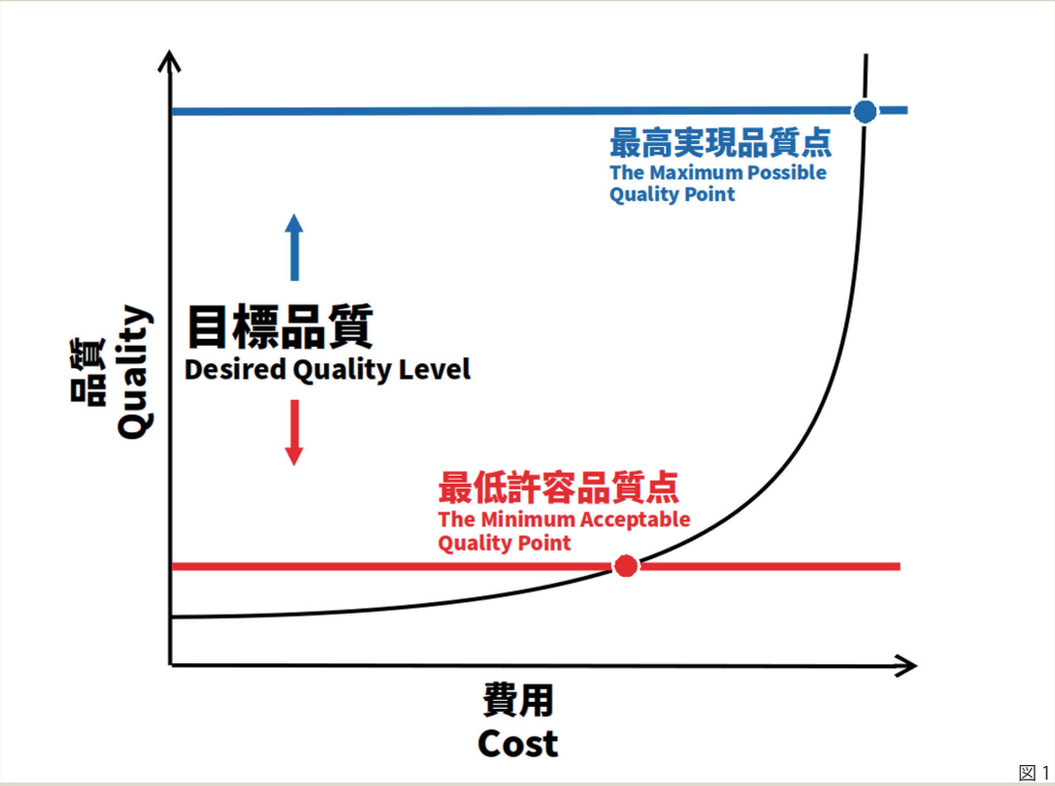


図 1　目標品質（DQL: Desired Quality Level）の考え方

いのが現状である。国際的な動向をみても、2004 年に Oltmans(2004) がデジタル・アーカイブの中長期的な維持管理に関するコスト評価の方法を提案した程度であり、継続的な議論にも発展していない。

こうした状況に対して本事業に先行する原野農芸博物館所蔵だんじりのデジタル・アーカイブにおいては低コストなデジタル・アーカイブについて検討を行った (藤本 2016)。この試みを通しては低コストなデジタル・アーカイブの実現に向けて確かな手応えを感じたものの、同事業は手探り状態の中で行われたために十分には体系化されなかった。

そのため、同事業を終えた後にも、より体系的なデジタル・アーカイブの手法を改良しつつ、低コストなデジタル・アーカイブの意義や位置づけについての概念的な枠組みについても整理を行ってきた。そうした概念的な枠組みの中でも特に重要な考え方が「目標品質 (DQL: Desired Quality Level)」である (藤本 2017)【図 1】。この考え方は単に従来からの高精度、高品質を目指すデジタル・アーカイブの方向性を否定するのではなく、低コストなデジタル・アーカイブとの方向性を明確化し、プロジェクトの計画と位置づけを明確化するための概念である。

従来のデジタル・アーカイブは主として精度と品質を高めることを最重要課題とし、これを実現するためのコストを考えることが一般的であった。そのため、費用を度外視した技術的な限界点である「最大実現可能品質 (MPQP: The Maximum Potential Quality Point)」を DQL としてきた。この方向性を指向することはデジタル・アーカイブにおける技術革新を促すとともに、一種の理想的なデジタル・アーカイブのあり方を考える上で非常に重要である。しかしながら、MPQP を指向すると、当然、資料一つに対するコストパフォーマンスは低くなるため、デジタル化の単価は跳ね上がり、デジタル化の対象資料はその単価に見合ったものに限られる。こうした理由から予算的あるいは技術的に制約の多い中小の組織には馴染まないという問題がある。

一方、限られた予算内でデジタル・アーカイブしなければならないケースにおいては最低限のコストで精度と品質を許容範囲内に治めることが必要となる。ここで許容できる精度あるいは品質の限界があると仮定するのであれば、その限界点は「最低許容品質点 (MAQP: The Minimum Acceptable Quality Point)」であり、如何にして DQL を MAQP に近づけるかが大きな課題となる。膨大な資料のデジタル化に悩みを抱えている博物館や、極めて限られた予算の中で運用されている地方の中小の博物館、美術館、図書館、資料館などはデジタル・アーカイブ・プロジェクトの計画段階で MAQP の検討を行うことが不可欠なプロセスとなるし、実際に本事業においてもこの点を検討することから始まった。

MAQP 指向のデジタル・アーカイブを目指す上で最初に検討するべき内容が必要となるコストの把握である。すなわち、1. 資料の輸送に関わる費用、2. 旅費や謝金などを含

写真　1. 本事業におけるライティングの設定 /2. 資料の設置の様子

む作業従事者の労働に関わる費用、3. 機材などを含む設備に関わる費用、の三つに大別でき、これら三つの観点からコストの見直しを行う必要がある。

本事業の場合、対象となる資料についてはすでに大東市立歴史民俗資料館に所蔵されていたため、輸送に関わる費用は検討する必要がなかったが、同資料館には専用の写場はなく通常の会議室のスペースでの作業を検討する必要があった。作業従事者に係る費用については同資料館の市民学芸員の方々の手によって行われることとなったため、人件費を検討する必要はなかったものの、知識と経験が皆無の市民学芸員でも可能な方法を検討する必要があった。そして、機材などを含む設備に関わる費用に関しては専用のプロフェッショナル機材がなく、限られた予算内で手配する必要があった。こうした問題を整理した結果、本事業では様々な方法を駆使することで大幅なコスト削減を目指した。

3. デジタル・アーカイブのためのライティング

本事業におけるデジタル・アーカイブ手法は原野農芸博物館所蔵だんじりのデジタル・アーカイブ (藤本 2016)、および島根県益田市匹見町における「集落アーカイブ」で用いられた方法を踏襲しつつ（藤本 2017)、様々な観点から手法の改良を行ったが、その中でも特に大きな工夫を行ったのがライティングである。

これまでは画像によるデジタル・アーカイブでは解像度を高めることが最大の目的とされてきたが、対象の立体感や質感を二次元の画像から認識するためには対象の影からコントラストやグラデーションも重要な要素となる。そのため、意図的に対象の立体感や質感を表現するためには理想的なライティングの設定を検討する必要がある。しかしながら、現在、一般的に使用されている文化財の撮影や歴史資料のデジタルアーカイブのライティングは人口照明が撮影に使用された 100 年ほど前から基本部分は変わらず、被写体に近接した光を均等配分して撮影されることが主流である。この問題はデジタル・アーカイブにおいて解像度の向上が最優先とされてきたことに加えて、照明機材が高価だったために少ない機材で効率的かつ無難な再現を求めた妥協の結果でもあった。

こうした状況に対して、近年になって爆発的に普及しはじめた LED や有機 LED 照明は従来のライティングの方法を根本から変え得る存在である。これらは低コスト、省エネルギー、低負荷を兼ね備えた照明機材であり、被写体の理想的かつ革新的な運用改善を実現できる可能性がある。また、耐久性という観点からも従来の撮影用ハロゲンランプや撮影蛍光灯などと比較しても優れていて、長時間にわたる作業にも最適である。実際に、原野農芸博物館所蔵だんじりのデジタル・アーカイブ (藤本 2016) では、開始当初に一般的な撮影蛍光灯を使用していたが、作業中に蛍光灯が切れる事故があり、予備の電球が底をつく事態に陥ることもあった。この問題に対して、プロジェクトの後半に

写真 3. 原野農芸博物館の自作の木製ライティング・フレーム /4. 紙管を用いたライティング・フレームのプロトタイプ

は演色性が Ra93 の LED シーリングライトを導入したことで、安定した光源を得ることができた。

こうした経緯もあって本事業においても LED を使用することにしたが、本事業ではライティングの設定にも大きな改良を加え、天空光をシュミレートした超低コストで大面積の「バンクライト」を採用した【写真 1】。古来から芸術作品は北向きの穏やかな光で鑑賞するのが理想とされていたが、これはデジタル・アーカイブにおけるライティングにも言える。理想的なライティングは人にとって自然に知覚できるライティングでもあり、十分な光量を得ることができれば、上空から光を入れることは合理的である。実際にこのライティングを使用して得られた画像は本事業の DQL を十分にクリアすることができた。

また、大面積のバンクライトを効率的に運用することで数メートルから数センチの多様な寸法の資料を同一空間で大量に処理でき、副次的な効果として、劇的な作業効率の向上も実現できた。原野農芸博物館や島根県匹見町での取り組みではライティングを左右および背面に配置していたが、この方法は左右および背面の作業空間を十分に確保できないため、撮影台への資料の設置や資料の配置の微調整、資料の置き換えなどが行いにくいという課題があった。特に、長時間の作業になると中腰の状態での作業が続くなど、作業補助者に対する肉体的負担も少なくはない。大面積のバンクライトを使用することで、そうした負担も大きく軽減され、作業空間に余裕があるため歴史資料の保全も確保しやすくなった。さらには、撮影技術を持たない人員でも、自然で見やすい画像を簡単に撮影できることも解った【写真 2】。このような観点の試みは海外でも存在せず、今後ますます予算と人員が不足する日本の現場に相応しい運用方法と考えられる。

4. 紙管パイプを用いたライティングフレームについて

原野農芸博物館所蔵だんじりの事例においては現場の状況に合わせて様々な撮影機材を自作し、特に、木製の角材を多様して資料の大きさに合わせたライティングフレームを作成した【写真 3】。この方法によって大幅なコスト削減と作業効率の向上を図ることができたが、これを実現できた背景には木工作業に長けたアシスタントの学生が居たことや、木工に必要な専用工具が原野農芸博物館に常備されていたこと、木工を行うための作業スペースが確保されていたこと、などの特殊な環境があった。本事業の場合にはそうした作業環境が揃っていたわけではなかった。また、原野農芸博物館のケースでは資料観察と資料に合わせたセッティングを行うために半日以上の時間を費やすなど、作業効率という点では改良の余地が残されていた。

この問題に対して、島根県益田市匹見町における「集落アーカイブ」で用いたのが紙管であった。紙管は極めて軽量であり、数種類のプラスティック製のジョイントで繋いで、様々な形のフレームを組み立てることができる。組み立て作業も直観的であり、誰でも容易に組み立てることが

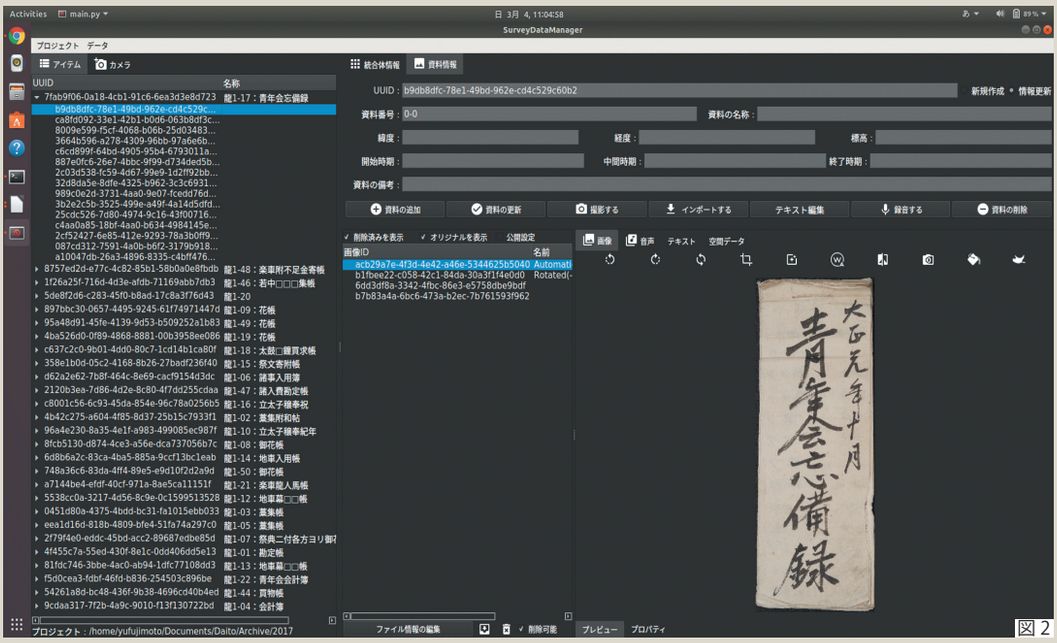


図 2　Survey Data Collector の画面

できる。組み立て作業も直観的であり、誰でも容易に組み立てることができる【写真 4】。紙管を利用することは資料保全の観点からも有用性が高いことが解った。例えば、万が一、フレームセットの転倒や落下等の事故が発生したとしても大きな被害が発生しにくいということに加えて、畳が敷き詰められた和室においても気軽に直置きできるという利点もある。

以上の理由から本事業においても紙管を使用する方法が検討し、NPO フィールドや池田市立歴史民俗資料館の宮元正博氏らの協力や実験的な取り組みを経て、実用的なバンクライト用のライティングフレームを開発した。事業では開発した紙管製のバンクライト用のライティングフレームを使用し、大東市立歴史民俗資料館の会議室に即席の写場を設営した。結果として、設営にかかった時間も数十分程度であり、原野農芸博物館での準備作業に要した時間と手間の問題はほぼ解決することができた。

5. デジタル・アーカイブ・システムについて

本事業に先行する原野農芸博物館所蔵のだんじりアーカイブの事例ではオンラインのデジタル・アーカイブ・システムとして「Survey Project Manager」を開発し、だんじりアーカイブの構築と公開を行った。このシステムはデジタル・アーカイブ・プロジェクトを管理するためのシステムであり、得られたデータを体系的に管理することに加えて報告書の共同執筆機能やデジタル・アーカイブの公開機能などの機能を持っている。しかしながら、このシステムは専用のサーバーが必要であるなど、システムの設置は簡便であるとは言いがたく、オフライン環境では使えないという問題があった。特にオフライン環境下においては撮影したデータとエクセル等の表計算ソフトに入力した資料の観察記録とのマッチングに関してもある程度の情報技術を要するという問題があった。

当初は完全にオンラインのデジタル・ワークフローを想定していたが、実際の運用においてはオンラインとオフラインの両方の状況を想定する必要がある。この問題を解決するために開発したのがオフライン環境下での使用を前提とした「Survey Data Collector」である【図 2】。このシステムは Linux 上で稼働するクライアント型のシステムであり、Survey Project Manager と同様に簡易オブジェクトプロファイル (SOP： Simple Object Profile) の動産資料用 L3 プロファイルを用いて設計されていて、Survey Project Manager との連携を念頭に開発を行っている【図 3、図 4】。また、同システムはオープンソースのシステムとして開発を行っていて、GitHub を通して誰でも入手でき、必要があればカスタマイズして利用することもできる。

Survey Data Collector はテザリング・システムとして開発を進めていたものであったが、データベースのスキーマを SOP に準拠させたことに加えて、画像回転やネガ・ポジ変換、コントラスト調整、グレースケール化などの基本的な画像処理機能や資料に対する音声メモ機能など、有用性

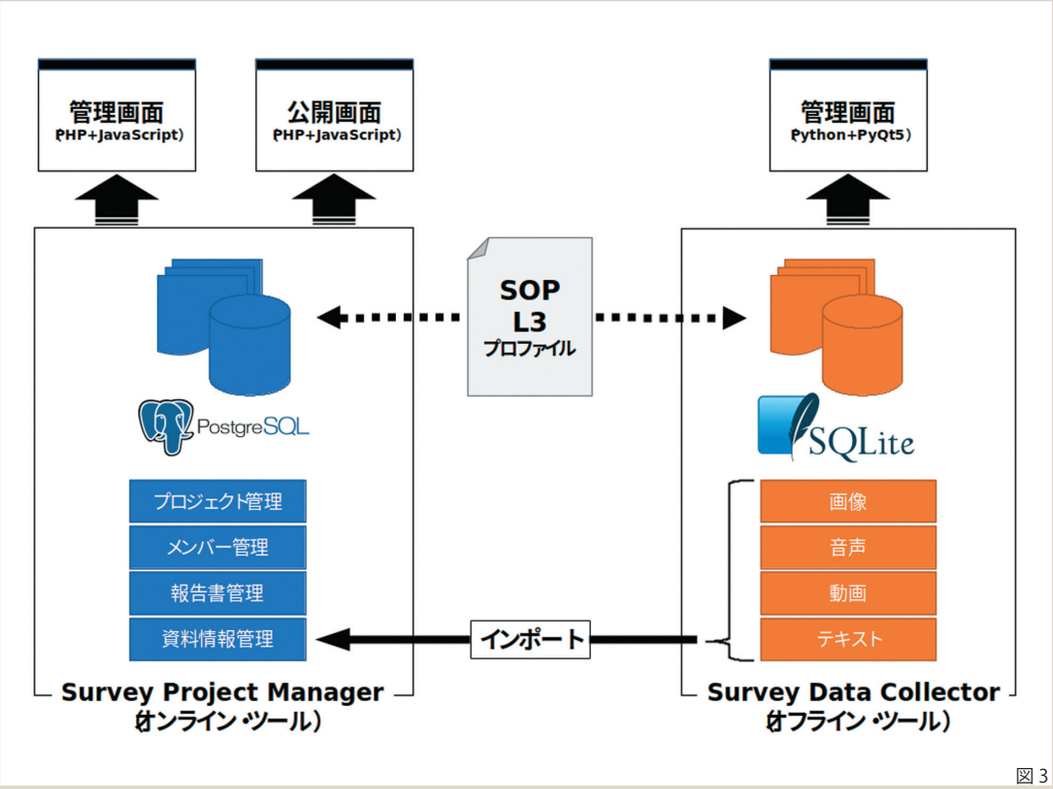


図 3　開発中のデジタル・アーカイブ・システム

が高いと思われる機能を順次追加したことで現在のシステムとなった。こうした開発経緯もあって、本事業が開始した時点では、あくまでデジタル・カメラを接続して使用することを前提としていたが、本事業の場合には 1) 資料撮影を行う作業、2) 資料の観察票を記入する作業、3) 文献資料に対する翻刻作業、の 3 つの作業があり、これらを並行して行うためには後処理でシステムにデータを取り込める仕組みが必要となった。そこで、本事業を通しては、CSV 形式のデータでシステムに入出力する機能を追加した。

本事業の場合には一つのシーンに対して 2 カットを原則とし、これが遵守されていたため、最初に資料群ごとにフォルダに整理し直し、自動でデータベースに情報を格納する仕組みを開発した。本事業のケースではこの方法で問題なくデータを取り込むことができたが、何らかの事故で 1 シーンに対して 1 カットしか撮影できていないケースや、逆に、1 シーンに対して 3 カット以上の撮影が行われていたケースが存在する場合、必ずしもうまく取り込めることは限らない。また、この作業に関しては難しくはないものの、コマンド入力による作業を行う必要があり、ある程度のパソコンスキルを必要とする。この点に関しては今後の課題としたい。

6. おわりに

本事業では原野農芸博物館所蔵のだんじりアーカイブの事例研究での成果を踏襲しつつ、斬新かつ体系的なデジタル・アーカイブの手法を実践した。この事業の成果として特筆すべき点は、1. 様々な工夫によって低コストなデジタル・アーカイブ手法の体系化に成功した点、2. 世界的に見ても斬新なライティング技術を導入したことで理想的なデジタル・アーカイブの構築に近づいたという点、そして、3. 前提とする知識や技術が無くても参加できるデジタル・アーカイブの手法を実現できた点、の三つの点が挙げられる。

特に、これらの成果のうちで三番目の成果は様々な可能性に繋がると考えられる。誰でも可能な方法を実現することで作業単価を大幅に低減できることに加えて、デジタル・アーカイブの作業要員の確保が容易になる。また、本事業での事例のように市民学芸員が積極的に作業に参加する機会を作ったり、小学生や中学生が体験学習の一環として博物館資料のデジタル・アーカイブに参加できる可能性もある。

全国的に伝統的な地域社会が崩壊する中では消えゆく記録をデジタル・アーカイブとして遺すことは重要な課題ではあるが、その一方で、地域住民に対して地域への興味を促すことも重要である。低コストなデジタル・アーカイブの手法を開発し、さらに要求技術を大幅に低減できたことによって、デジタル・アーカイブの作業そのものを社会教育あるいは生涯教育のプログラムとして展開できる可能性が見えてきた。

本事業を通してはそうした方向性が見えてきた一方で、技術的には改善するべき点も山積している。デジタル・アー

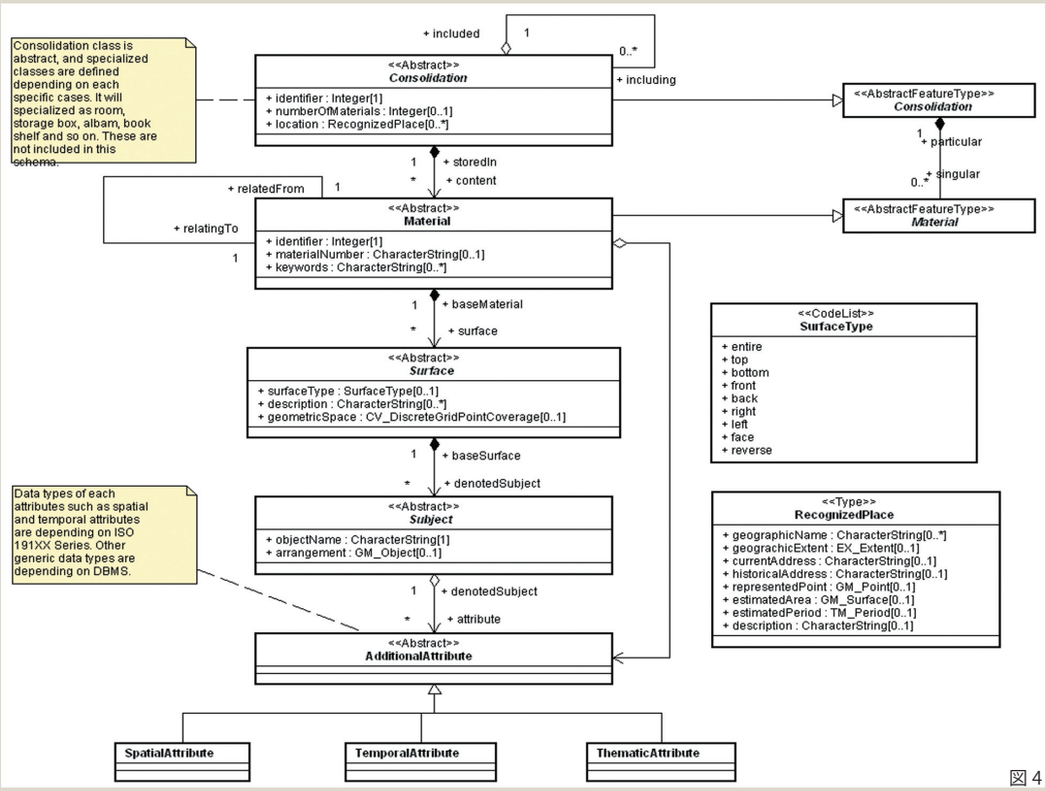


図 4

図 4　SOP の動産資料用 L3 プロファイル

カイブ・システムの「Survey Project Manager」および「Survey Data Collector」は現在も継続的な開発を続けているが、安定性や使い方に関しては改善の余地が残っている。また、マニュアル化が進んでいないため、一般ユーザーが気軽使える状態でもない。今後は、手法のみならずシステムの改善についても取り組みたい。

参考文献

[1] Oltmans, E. (2004). Cost Models in Digital Archiving: An overview of Life Cycle Management at the National Library of the Netherlands. LIBER Quarterly, 14(3-4), pp.380-392.
[2] 藤本悠：原野農芸博物館所蔵だんじりのデジタル・アーカイブ，だんじりを活かした地域協働事業実行委員会報告書 II「だんじりの記録、だんじりの記憶」，No.2，pp.12-21（2016）.
[3] 藤本悠：地方小集落の「集落アーカイブ」の課題と実践的取り組みについて，人文科学とコンピュータシンポジウム 2017 論文集，pp.7-14,（2017）.

第2部　旅するミュージアム

アーカイブ化された資料を活用し、地域の企業や団体とともにモバイルミュージアムを作成する。他分野と連携することで、来館困難者に対しても「博物館体験」の提供を可能なものとする。

第１章では、資料を活用していくために行った旅するミュージアム事業の概要を説明し、事例調査をふまえて行ったモバイルミュージアムのキットの検討、そして市民学芸員と制作したモバイルミュージアムのキットについて報告をする。

第２章では、モバイルミュージアムのキットを活用して、さまざまな施設で行った実践の様子について、実践者あるいは外部有識者の立場から報告をする。

第２部　第１章　だんじり資料を活用していくために
旅するミュージアム事業の趣旨－アーカイブの活用、資料の活用－

Web 公開されているミュージアムや図書館のデジタル・アーカイブはどれほど利用されているのだろうか。大東市立歴史民俗資料館のような小規模館の場合、近隣の公共図書館と、各自治体・博物館からの受贈図書を収蔵する書庫があるものの、調査や研究のために十分であるとは言い難い。そこで、文献資料を参照する際には、国立国会図書館デジタルコレクションや大学などが制作した古典籍のデジタル・アーカイブなどを利用することもある。

一方で、実物資料のデジタル・アーカイブはなかなか活用する機会がない。例えば、地域の神社に残る絵馬師の調査をする場合、従来通り図録や研究紀要などに頼らざるを得ない。現在、国立・都道府県立館の所蔵する貴重な資料ならいざ知らず、地域の資料館で扱う「ありふれた」資料が、デジタル・アーカイブとして公開されていることは少ないように感じる。例えば調査を行うとしても、大阪にある絵馬と同じ作者の絵馬が新潟、香川にあったとしても、小規模館でその移動費が賄えることはない。

本来は必要な実物資料のデジタル・アーカイブ化ではあるが、現段階では活用するために十分な情報量であるとは言えない。一方で、大小様々な組織で多くのデジタル・アーカイブが作られはするものの、活用されないまま、作りっぱなしになっているものもあるという。、全国津々浦々の小規模館のデジタル・アーカイブが Web 公開されるまで、デジタル・アーカイブ化の作業を続けるためには、「研究」以外でも活用されるアーカイブである必要だと考えた。つまりデジタル・アーカイブを利用する人の母数を増やし、「つくる＝完成させる」以外に目的をもったデジタル・アーカイブの構築を企図した。

例えば、高齢者施設に出前講座・出張展示に向かった場合、館外に持ち運べる資料には限りがある。不足する情報をデジタル・アーカイブで補完できないだろうか。あるいは、館外でのアウトリーチ活動において、デジタル・アーカイブされた資料のデータを活用できないだろうか。あるいは、アウトリーチ活動そのものをデジタル・アーカイブとして蓄積していくことで、資料の利用歴や「群（グルーピング）」を次の活用時の参考にできないか。このようにデジタル・アーカイブを「教育普及」のなかで活用していく方法を模索することとした。

そこで「旅するミュージアム」では、デジタル・アーカイブ化する「だんじり資料」を活用していくためのキット開発と、教育普及プログラム開発から成る。本章では、特にキット開発について説明していく。キット開発では、展示の企画・設計を専門とされている北村彰氏、教育プログラムの開発に携わる佐藤優香氏、事務局より河島明子が加わり検討を行い、制作した。

（武井二葉）

事例調査と内容検討

河島 明子
大東市立歴史民俗資料館

1. はじめに

旅するミュージアム事業（以下、本事業）は、博物館の存在を認識していない方や、認識していても交通事情などを理由に利用が困難な方たちのために、博物館を届けることを目標にしてはじまった。全国の博物館において、移動博物館や出張展示など、様々な名称やスタイルで同様の取り組みが行われているため、先行する事例の調査を行い、とりまく課題と本事業の位置づけを整理していくことにした。

2. 岐阜県美術館における事例調査

事例調査の対象として選んだのは、岐阜県美術館である。岐阜県美術館は、岐阜県にゆかりある作家をはじめ、ルドン作品のコレクションを持つ。2015 年にアーティストの日比野克彦氏が館長に就任し、「ナンヤローネプロジェクト」など、特色のある教育普及事業を展開している。この度の調査では、「ナンヤローネプロジェクト」および「スクールミュージアム」を主な対象とした。前者はユニットタイプの展示という点や付随するプログラムを行っているという点において、後者はアウトリーチという点において、本事業と共通点が多いと考えたためである。なお調査には、本事業に外部有識者として関わる、北村彰氏、佐藤優香氏に同行していただいた。

まず「ナンヤローネプロジェクト」について、同館のフリースペースにある《Such Such Such》を中心に、その手法や運営について説明があった【写真 1】。コネクタと呼ばれるコミュニケーションのためのツールが並べてある台座や交流スペースは、組み替え可能なユニットで制作されていた。また、フリースペースのため、誰でもいつでも楽しむことができるという一方で、月に 1 度のプログラム「ナンヤローネアートツアー」では、スタッフや参加者同士が交流できる機会を設けていた。「スクールミュージアム」では、厳重な温湿度及びセキュリティの管理をはじめ、学校ではない空間に変容する工夫について詳しく説明があった。

3. 課題の整理と制作物の検討

岐阜県美術館での調査を経て、次のような点を考慮して本事業を進めることにした。

進化系アーカイブと旅するミュージアム事業（以下、本プロジェクト）全体は、大東市の旧龍間村経寺地区で曳行されていただんじりについて、その彫物を主題とし、関連する古文書を含め、アーカイブやモバイルミュージアムを展開していく。将来的にはアーカイブを備えたアウトリーチを展開していくが、年度末の完成を目指すアーカイブに先んじて本事業では彫物を扱っていく。大東市にとって地域の歴史を伝える貴重な資料という理由ばかりでなく、その文脈から切り離したとしても、だんじりの彫物が日本の歴史的な建造物や祭礼を彩る造形美術という視点から、存分に興味を引く対象となりうると考えた。当初から不特定多数が訪れるショッピングモールでのイベント出展や、市

写真　1. 岐阜県美術館

外の小学校でのアウトリーチも想定していたためである。

また、だんじりの彫物の展示だけでは、受け入れが困難なケースも想定して、柔軟で汎用可能なユニットを検討することにした。例えば、小学校へのアウトリーチでは、地域の祭礼について学ぶ学年に限らず、幅広い学年の子どもたちが関心を持つような内容にする必要がある。

以上から、造形が複雑で繊細なだんじりの彫物を確実に移送し、安全に展示できることが最優先と結論づけた。特に安全面では、特別な監視が不要な状態であっても、一定期間の展示を行う承諾が得られるよう、受け入れる側の精神的な負担を最少限に押さえる必要があった。

そこで、外部有識者として関わるデザイナーの北村彰氏より、展示台ケースというアイデアの提案があった。2017年8月、高齢者施設においてはじめて出張展示を行う際、最も難点だったのが彫物の梱包であった。適切な規格の段ボールがなく、継ぎ合せて梱包を行ったが、強度が保たれないうえ、使い回すことができずロスが多い。これをふまえ、梱包と展示を兼ね備えたケースを制作し、さらに単独ではかさ張ってしまうアクリルケースをそこに入れ込むこととした。車両に積載してもスライドしないよう、資料に負担のない方法でスタッキングができるよう考慮した。加えて、壁面に掲示を自由に行えないケースを想定し、屏風のようなコンパクトで持ち運び可能なボードの制作も検討していくことにした。屏風の制作については、次項で詳しく述べる。

材質はまず木製を検討したが、コスト面から見直す必要があった。さらに、少人数での運搬や展示作業を実現させるため、軽量であることが求められた。そこで、着目したのがハニカムボードである。重量とコストが抑えられる理想の素材であったため、これを採用して展示台ケースを制作することにした。

4. 展示台ケースの特徴と課題

展示台ケースは結果的に二つのタイプを制作した。最初に制作したタイプをタイプA【写真2、写真3、写真4】、次をタイプB【写真5、写真6】と呼び、その特徴を整理したい。タイプAは5面の箱に、まず逆さにしたアクリルを、次に綿布団で細部を保護したうえ、エアキャップに包んだ彫物を入れ、上蓋をのせる構造である。上蓋にはフェルト張りの台座が着いており、裏返して資料を展示する。当初は、箱部分に上蓋を載せて展示する計画だったが、目線の低い子どもや車いすを使用する方への配慮から、上蓋をそのまま会場の机などの台に置いて展示を行った。このように、まずタイプAを実験的に1点制作したが、展示において、箱部分が必ずしも必要ないことがわかったため、タイプBの案が浮上した。タイプBは、箱自体が斜めに分解できる構造だ。資料を展示する際は、背面と両側面の一部がハニカムボードに覆われる。タイプBは梱包時にアクリルを逆さにする必要がある点や、強度があまり保たれない構造となる点で課題が残った。

なお、いずれのタイプも塩化ビニールのシールを貼るこ

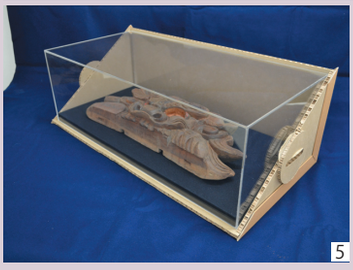


写真　2. 展示台ケース（タイプ A）展示時 /3. 展示台ケース（タイプ A）移送時 /4. 展示台ケース（タイプ A）スタッキング
5. 展示台ケース（タイプ B）展示時 /6. 展示台ケース（タイプ B）移送時

とにしたのは耐水性への配慮である。しかしそればかりではなく、搬入作業に遭遇した人たちが「何があるんだろう？」と目に留め、日常生活のなかに博物館が入り込む意外さや面白さを演出できると考えたためだ。

5. まとめ

ここでは、岐阜県美術館での調査にはじまり、それをふまえた検討の過程、展示台ケースというアイデアから制作までを詳しく述べた。

アウトリーチのためのユニットを制作する場合、資料の情報や、情報を伝えるための効果的なツールを組み込むのが一般的だろう。ところが本事業では、展示台ケースという、安全な梱包と展示に特化した制作物に限った。その理由をさらに言及するなら、ハニカムボードでの制作そのものがはじめての試みだったため、検討に時間を費やすことにした点、さらに、だんじりの彫物をモデルケースとして、様々な資料に適用させる可能性を重視した点が挙げられる。いずれにしても、展示台ケースの制作だけでアウトリーチの準備が達成したわけではない。あくまでハード面の懸念を取り除いただけであって、展示の内容やねらいとするメッセージのようなソフト面への注力が必要となっていく。次章では、様々な場所や対象に向けて本事業が展開されていった様子が報告されるが、この展示台ケースがこれらの実践すべてに適応できるふさわしいかたちであったと確信している。

最後に、調査にあたり、岐阜県美術館の福井清治氏、村瀬範弘氏には、お忙しいなか多大なご協力をいただいた。ここに記して、改めて感謝の意を表したい。

市民学芸員とのユニット制作

河島 明子
大東市立歴史民俗資料館

1. はじめに

市民学芸員と制作を行ったのは、旅するミュージアム事業（以下、本事業）において、展示台ケースと合わせてアウトリーチに使用する屏風とその台座である。掲示用のボードに屏風の構造を採用することにしたが、その理由は 3 つある。まず 1 つ目は、だんじりという伝統的な祭礼の展示に、日本特有の屏障具が合うこと。2 つ目は、数ある屏障具のうち、屏風は単体で自立できる構造のため、あらゆる条件で使用可能であるうえ、コンパクトに持ち運びができること。最後に、大東市立歴史民俗資料館（以下、資料館）の市民学芸員が、当事者として関わりやすいことである。なお、市民学芸員については、第 1 部で詳しく記してあるため、これを参照されたい。

2. 屏風制作の背景

3 つ目の、市民学芸員の関わりやすさついて詳しく触れたい。資料館では、屏風の構造について、市民学芸員が知る機会がある。市民学芸員として活動をはじめる前に、学芸員体験講座という連続講座を受講することになっているが、そのうちの 1 回において、収蔵資料の屏風を扱っている【写真 1】。その講座の内容は、屏風を実見しながら、とりわけ紙蝶番の貼り合わせに着目する。実際にスチレンボードを和紙でつないでミニチュアの屏風を制作する。市民学芸員すべてにその経験があったことから、ハニカムボードを和紙でつなぐ屏風制作を呼びかけた【写真 2】。

3. 試作と課題

市民学芸員と屏風を制作するなかで課題として見えたのは、ハニカムボードの耐久性の問題である。何度も運搬しているうちに、ハニカム状の側面が凹んだりしていまう。そこで、ハニカムボードの側面をゴムで補強したものも、比較対象として業者に依頼して制作した。

さらに、資料館が使用している車両が小型であり、最大 120cm までしか積載することができない。高さ 120cm の屏風を床に立てるだけでは、視点が低くなってしまうため、台座を用意しなければならなかった。そこで、軽量で加工しやすいエッジボードでの試作を、市民学芸員とともにアイデアを出しながら行ったが、強度やデザイン性の点から、さらなる検討が必要であった【写真 3】。なお、この台座の制作は 11 月に行った。これ以降のアウトリーチ先では、台座に代わる椅子や机をうまく利用できたため、屏風の展示に支障はなかった。しかしながら、台座に代わるものすらないケースもありうるだろう。展示台ケースの箱部分を応用するなどして、今後も試作を続けねばならない。

4. まとめ

市民学芸員との制作は、屏風の構造をどのように応用すればよいか、素材を用いてどう台座を制作するかを検討するところからはじめた。作業のサポートではなく、より多くのアイデアを出し合い、試作と検討を進めることで、市民学芸員同士や進化系アーカイブと旅するミュージアム事

写真　1. 屏風について学ぶ講座（学芸員体験講座「美術」）/2. 屏風の構造をハニカムボードに応用する　3. 台座の試作

業（以下、本プロジェクト）への関わりが深まると考えたからだ。しかしながら、呼びかけに応じる市民学芸員が少なかったことは、この関わり方を見直すべきだったと言えよう。

本プロジェクトは、前年度の同様の取り組みを引き継いでいるが、前年度は一年間を通したチームを編成して市民学芸員が関わっていた。今年度はチーム編成を行わず、登録する市民学芸員全員に随時呼びかけて参加を募った。チームに縛られず、いつでも関われる点は良かったが、単発的な関わりが、本プロジェクトが目指す到達点などを思い描くことを阻み、参加する意欲へ結びつかなかったと思われる。

だんじりの彫物は、市民学芸員によるクリーニングや古文書を通した調査なしには公開へ結びつかなかった。アウトリーチを行い、多くの人たちに公開していくという段階でも、市民学芸員が当事者として関われる舞台をデザインする必要があった。なぜなら、様々な人たちが関わることによって、失われるはずだった文化財が救われ公開に至ったというそのストーリーそのものこそ、本事業において発信すべきテーマの一つと言えるからだ。

第２部　第２章　だんじり資料を活用した公開事業

だんじり資料を活用した公開事業の概要

1. 教育プログラムと展示

教育プログラムの開発においては、高齢者や障がい者、近くに文化財と接する機会が少ない学校など来館や文化財に対するアクセスに制約がある方を対象として「だんじり資料」を用いた実践を行った。1)「だんじり資料」を用いるということ、2)「展示」と教育普及プログラムを組み合わせること、という以外は、ツールや対象、実践者が異なる実践であり、すべてがグラデーション状に重なりあうことで影響を与え合いつつ、次年度以降の方向性を検討するという目的で実施された。そのため、次項以降の各報告からは時系列がわかりにくいため、ここに説明する。

2. 概要

まず、美術科教育を専門とする福本謹一氏と博物館教育を専門とする佐藤優香氏によって「だんじり資料」を鑑賞教育で活用するための検討会議を行った。そして、博物館と学校という２つの場所で実践をすることになった。まず、2017 年 7 月 28 日に、京都文化博物館ならびに同館学芸員村野正景氏の協力を経て、非公開のワークショップを佐藤氏が実施した。（第 4 節）

この実践をふまえて、8 月 7 日～ 18 日に有料老人ホーム野崎苑において「ちょっとむかしのくらしとまつり」という展示と関連イベントを武井が実施した。（第２節）

さらに、8 月 23 日に大東市産業振興課の主催する「第 2 回市内「企業＆施設」探検ツアー「ものづくりの今と昔を学ぼう！！」」という事業のなかで、明星金属工業株式会社の協力を得つつ、だんじり資料を鑑賞するためのキットを使用し、実践を行った。（第６節）

7 月 28 日のワークショップの後、福本氏、佐藤氏らと実践の検討会議を行い、小学校向けのプログラムにアレンジした。そして、10 月 19 日に神戸市立鹿の子台小学校校長村上力磨氏、教員安達漠氏らの協力のもと、佐藤氏と筆者により実践を行った。（第４節）

さらに 12 月 3 日には、川村義肢株式会社ならびに介助犬のひろば実行委員会の協力を得て、同社の剣持悟氏の助言・調整のもと、介助犬のひろばというイベントのなかで「旅するミュージアム」を実施した。車いすや聴覚に障がいをもった方の来場も想定されたため当日のレポートは、障がい者対応についての経験を持った学芸員である西谷美紀氏にお願いした。なお、西谷氏は前述の佐藤氏の京都文化博物館でのワークショップにも加わっていただき、本事業の趣旨を汲んだうえでの報告となっている。（第３節）

また 2018 年 1 月 23 日～ 2 月 2 日、大東市の学校である氷野小学校においても河島明子が「ちょっとむかしのくらしとまつり」を紹介する展示と教育プログラムの提供を行った。（第５節）

最後に 2 月 17 日に当館行われたイベント「れきみんカーニバル」において、不特定多数を対象としたプログラムを実践した。（第６節）

（武井二葉）

高齢者施設における「旅するミュージアム」の実践について

武井 二葉
大東市立歴史民俗資料館

1. はじめに

2017 年 7 月 23 日の京都文化博物館でのワークショップを経て、8 月 7 日～ 18 日まで大東市内の有料老人ホームにて「旅するミュージアム」を実施した。時期については施設側との協議の上、決定したが、本事業全体のなかでは早い段階で行われたため、この後、展示の方法や教育プログラムを検討していくためのパイロット的な要素が強いものとなった。

展示も簡易な方法で実施し、館外で資料を展示するためには何が必要なのか、搬入搬出の際には何が必要なのかなどを検討する材料とした。野崎苑との調整は徳洲会病院植田琢也氏の協力を得て、事業の実施にあたっては有料老人ホーム野崎苑の中谷たづ子氏、能崎たき子氏から助言をいただきながら、展示は筆者と河島明子が、展示解説は筆者が行った。

2. 事業目的・内容

これまでも大東市立歴史民俗資料館では高齢者施設からの団体見学の利用はたびたび受け入れてきた。外出できる機会が限られているので、遠足気分を味わえていいと毎年来館してくださる団体がある一方、移動手段などの理由から 1 回だけの利用になっているところもある。そんななか、こちらから出かけていくニーズがあるのか、そして出かけていく場合にはどのようなプログラムが求められるのかを検討するため、有料老人ホームでの実践を行った。

本事業を実施するにあたり、中谷たづ子氏、能崎たき子氏と一緒に企画を検討した。そのなかでだんじりだけでなく、昔の道具も展示・紹介して欲しいという施設側の要望があり「ちょっとむかしのくらしとまつり」というタイトルの展示となった。また、入所されている方に少しでも興味を持っていただくために、展示の 1 日目に展示解説を実施することになった。事前に施設内で行われているワークショップを見学させていただき、手を使ったものづくりのワークショップも検討してみたが、当日の人数が把握できないこと、できることとできないことが人により異なり、複雑な工程を持つプログラムの実施が難しいことなどから、その場でのアドリブが可能な展示解説とした。

(1)「ちょっとむかしのくらしとまつり」展示
展示期間：2017 年 8 月 7 日（月）～ 8 月 18 日（金）
展示内容：「ちょっとむかしのくらしとまつり」
「いえのなかのくらし」「いえのそとのくらし」「秋まつりとだんじり」の 3 つのテーマを実物資料とパネルで紹介。入所者の方に親しみがあると思われる祭りや暮らしに関わる資料と、氷づくりやだんじりの彫物といった「龍間」ならではの資料をあわせて展示。

(2)「ちょっとむかしのくらしとまつり」展示解説
展示解説は、展示初日の 8 月 7 日（月）13:30-14:30 で実施

写真　1. いえのなかのくらし

した。展示している場所で実施したため、集まってきた参加者は、まず展示をそれぞれのペースで見てから、事業がはじまった。馴染みがあると思われる「ちょっとむかしのくらし」の道具を「いえのなかのくらし」「いえのそとのくらし」という展示の分類にしたがって解説した。特に「いえのなかのくらし」では、知っているモノを見ると、自然と会話がはじまるので、そこはそのままにして時々相槌をうったり、一言二言「解説」を入れたりして進めた。少し時代背景が説明できたところで「まつり」の資料としてだんじりの彫物を紹介した。だんじりに馴染みがあり、見てわかる方もあれば、あまり馴染みがなく説明が必要な方もあった。また、昨年度事業で作成した「まつりの音・まつりの声」という映像を紹介した。これは市民学芸員が制作したもので、30 台以上ある市内のだんじり祭りで採録した「掛け声やお囃子」を見たり、聞いたりできるものである。実際に視聴するのは解説後になってしまったが、自分の住んでいた地域を探して、視聴するなどインタラクティブに展示と関わる様子が見られた。

「ちょっとむかしのくらし」は対話型の解説であったが、「まつり」の方は、どちらかといえば一方的な解説となった。

3. おわりに

効果の測定にあたって、アンケートではなく、展示のなかに「感想ノート」を置いておくことにした。ノートには「昔の時代を思い出しました。そういえばおばあさまの所に幼少の時にいって見たことがありました。時々はこういうふうに昔をなつかしく思うことも大事なことのように思えます」というように「懐かしさ」を記述した方と、「いろいろ知らない事を教えて頂いて「目からウロコ」のお話でした。田植えの時にどうしてまっすぐそして横一線に植える事が出来るのだろうと思っていただけにわかって良かったです」というように「新しい発見」を記述した方とに二分された。

「ちょっとむかしのくらし」の道具は生まれ育った地域によって異なるため、「懐かしさ」と「目新しさ」の二つが感想にあらわれたものと考える。しかしながら、それ以上のことは見いだせず、例えば映像による記録によって、会話を分析するなど効果の測定には検討の余地があった。

また初日に展示解説があってからどの程度の利用があったのか、検証しようがないことにも後から気づいた。病院職員の方により長期に入院されている方にもチラシをご案内いただいたとお聞きした。また、病院入口のエントランスでも事業の案内をしていただいた。どのような方がどれくらい来て頂いたのか、測る方法を用意しておくべきであった。

展示については、だんじりの彫物以外は、露出展示となった。そのため、施設職員の方が事故の起こらないよう施錠時に資料が手の届かない位置に移動するなど気を配ってくださった。しかし、なかには備中鍬など刃先のある民俗資料のもあり、資料の選定には留意する必要があった。

たくさんの課題を見出すことのできた実践ではあったが、

写真　2. 会場となったスタッフステーション /3. いえのそとのくらし /4. まつりの展示 /5. 病院エントランスのデジタルサイネージ
6. 手にとりやすいようにと考えたキャプション /7. 展示解説 /8.「まつりの音・まつりの声」の視聴

最後に展示最終日に展示資料が一つ増えていたことを紹介したい。糸車・綿繰り機の説明をする際に、「仏餉袋」という木綿製品を紹介した。仏餉袋とは、仏に供える米を入れて、檀家より寺に持っていく袋であるが、その家の女性が織った木綿が使われることが多いという。展示最終日にテーブルの上に袱紗と袋が展示してあり、「昭和の袱紗とお布施袋（お米入れ）」というキャプションが置かれていた。
展示解説のなかでは、こちらから「目新しい」ことをお伝えするだけでなく、利用者の方からも「懐かしい」思い出や、道具の使い方など教えていただくなど双方向の交流・対話があった。こちらの意図したことではないが、展示のなかでもこのような「交流」が生まれたのは、これから館外の展示を考えていく上でのヒントとなったように思う。

障害者を対象としたモバイルミュージアムの実践について

西谷 美紀
灸まん美術館

1. はじめに

2017 年 12 月 3 日「介助犬のひろば in 北河内 2017（以下、介助犬のひろば）」に参加し「進化系アーカイブと旅するミュージアム事業」における障害者を対象にした実践プログラムを行った。「介助犬のひろば」は、身体障害者補助犬（介助犬、盲導犬、聴導犬）の啓発を通じて、誰もが暮らしやすい街づくりを考えるという趣旨で毎年開催されている。イベントは、介助犬とのふれ合いコーナー、車いすの体験、コンサート、手話のレッスンなどがあり、今年は大東市内の川村義肢の本社が会場となった。川村義肢は、義肢・装具・車椅子・介護支援機器などの製造販売を行っている会社で、大東市立歴史民俗資料館とは、すでに企画展「古くて新しい おしごと図鑑」などで展示協力を受けていたという経緯からイベントの紹介を受け、今回の事業を行うことができた。

2, 事業目的・内容

本事業では「介助犬のひろば」のイベント趣旨により沿うかたちで、障害のある方も資料館を楽しめるモバイルミュージアム（以下、M ミュージアム）の実践を目的とした。M ミュージアムは、単に館外展示をするだけでなく、館外において「博物館体験」の提供を試みることを目的とし、次のようなブース作りを行った。

（A）だんじりの音をスピーカーで体験

2015 年度に収集した音源資料を活用したプログラム。だんじりの曳行時の太鼓や鉦の音、掛け声を録音した音源を特殊なスピーカーで再生し、音だけでなく振動を体感するコーナー。ここでは、抱えることで音響を身体で体感できる「抱っこスピーカー（HugMe）」を用意した。このスピーカーは、直径 13 センチ、長さ 40 センチの大きさで、座布団を丸めたような円筒形をしており、適度な重量で胸に抱えて音の振動を感じることができる。また、だんじりの映像も同時に流すことで音源の臨場感をだした。

（B）だんじりの彫り物の展示・解説

音の展示に関連して、だんじりの彫り物の展示を行った。担当者が絵本でだんじりについて解説を行い、彫り物を直接触って大きさや彫りの深さを手で感じてもらうコーナーとして用意した。

（C）資料館活動の紹介

大東市立歴史民俗資料館がこれまで行ってきたバリアフリーの実験プログラムをパネルで紹介した。また、制作に協力した北河内ユニバーサルマップ JR 住道版の掲示や野崎駅版のマップ作りのワークショップについてイラストや写真などで展示した。

写真　1. イベントのチラシ /2. だんじりの映像コーナー /3.「抱っこスピーカー」の利用
4. だんじりの彫り物の展示 /5. 資料館活動の掲示コーナー /6. 資料館職員の解説

3. 当日の様子

大ホールの入り口にブースを設置できたので、比較的に目に留まりやすい位置にあり、多くの参加者が体験やパネル展示に足を止めてくれた。「介助犬のひろば」は、障害者、介助者、企業関係者だけでなく、一般の人も参加できるイベントであったため、様々な人が来場しており、まさにユニバーサルな場であった。最も人気を集めたコーナーは「抱っこピーカー」の音の体験である。だんじりの迫力ある映像とともに、体にズドンズドンと太鼓の音が響く体験は、大人から子供までが興味を持つことができた。「抱っこスピーカー」は、視覚障害者がコンサートなどで音を楽しむツールとして定着しつつある機械である。しかし、日常の生活で見かけることは少なく、視覚障害のある人以外にとっても貴重な体験の場となった。だんじりの彫り物は、露出して展示していたので、やや控えめに見学している人が多かった。今回は、音の体験からだんじりへの関心を深めるよう誘いたかったが、ブースの都合でだんじりの部分的な見せ方に留まってしまった。資料館活動の紹介は、大きな衝立を用意してパネル展示を行った。これまで実践してきたバリアフリー事業の紹介を行い、障害がある人に資料館の存在を知ってもらう機会となった。

4. おわりに

本事業は、障害者を対象にした実践プログラムとして企画したが、ブースで体験する参加者は、障害者だけでなく一般の人も多く、一概に対象者を限定するものではなかった。ただ、障害者同士でも、それぞれで利用している機械や体験は異なり「抱っこスピーカー」の存在は、相互の理解を深めることができた。今回は、音源資料をメインとし、映像で見るだけでなく、音を感じる体験から、資料を手で触る体験へと繋げる導線を考えたが、触れる体験のハードルは高かったようである。触る体験は、ほぼ触るだけとなり、もう少し見どころや触りどころの仕掛けを準備しておく必要があったかもしれない。一方、音を耳以外で感じることは、日常生活では体験できない感覚として注目を集めた。実際に、振動の体験をしてみると「音に触れる」という感覚を覚えた。まつりに参加すると、太鼓の重低音は体の中で振動し、見ているものを高揚させる音の効果がある。「抱っこスピーカー」で音を感じるという行為は、障害の有無に関係なくだんじりの迫力を知る必要不可欠な体験といえ、音源資料の有効な活用方法として期待できるのではないだろうか。

最後に、介助犬のイベントで資料館ブースがあることを不思議そうにみる参加者も多かったが、このように異業種の場に参加することは、新しい資料館活動にとって大きな意義を持つ。今後も実践の数をこなしながら、民間企業と協同し、双方の専門性を用いてユニバーサルに対応したニュータイプの博物館体験の模索を続けていきたい。

学校における実践とそのプレワークショップ

佐藤 優香

1. はじめに

だんじりの部材を博物館の外へ持ち出して実施する「旅するミュージアム」の一事業として学校への旅を企画した。この実践では、「見る」「触る」という言葉をより積極的な関わりとしてとらえたいと考えた。だんじり彫り物をはじめとする資料類を貸し出すこと、展示することで「旅するミュージアム」が完結するのではなく、鑑賞者が資料との関わりを見いだすことのできる体験の提供をも含めて企画しようとした。すなわち、本実践は、鑑賞者が資料との関係を取り結び、よりひろがりをもった資料活用を目指す試みである。

本節では、旅するミュージアムを学校で活用してもらうためのプログラムと道具立てについての試行について記録する。そして、実践の考察を通して、旅するミュージアムの旅支度についての提案を試みる。

学校での実践の場合、時間については 45 分を 1 単位とし、学校ごとに充てることができる時数も異なる。各学校との調整により活動内容の調整が必要であり、参加者に対して関われるスタッフの人数や活動時間などにも制限がある。そこで、わたしたちは、どのような実践の可能性があるのかをさぐるために、制約のないプレワークショップを実施し、それをふまえて学校での実践をデザインすることにした。

2. ワークショップ 1〈鑑賞からフィールドワークと作品づくりへの発展〉

プレワークショップは、「だんじり彫刻からはじまる鑑賞と表現　―建築における立体装飾へのまなざしとイメージ力の育成―」をテーマとした。だんじりの部材である彫り物の鑑賞をきっかけにして、建築などにほどこされた立体装飾の鑑賞と、立体造形表現の 2 つのにつなげる活動としてデザインした。活動は、だんじりの彫り物をじっくり鑑賞することに始まり、フィールドワークや粘土を用いたものづくりを含む以下 5 場面から構成されている。

〈出会う〉実物資料の鑑賞：博物館利用
〈味わう 1〉町歩きによる鑑賞：フィールドワーク
〈味わう 2〉造形表現：アトリエワーク
〈共有する〉参加者作品と資料の鑑賞
〈ふりかえる〉活動全体のふりかえり

2-1. コンセプト

ワークショップをデザインするのに際し、参加者の学びへの視点からコンセプトをまとめた。参加者の学びとしては、鑑賞と表現を循環させた活動を通して、1）伝統文化の鑑賞へのまなざし、2）身の周りにある文化、生活の中にある表現の発見と鑑賞、3）自らのイメージをひろげ、深めていく表現、4）ゆたかな思考と言語を媒介としたコミュニケーションの 4 点の実現を目指そうとした。

活動においてとくに重視したのが鑑賞である。だんじり

写真　1-2. 旅する資料の一例：だんじり資料

にほどこされた彫り物の鑑賞を通して、立体造形作品について自分なりの鑑賞の手がかりを持つことを目指したいと考えた。だんじりの彫り物の鑑賞をきっかけに、身の回りにあるさまざまな立体装飾へも鑑賞の対象を拡げ、特に神社仏閣などの伝統的建築にほどこされた装飾への関心を高めることができれば、ワークショップの経験はそこだけに留まらずひろがりをもったものになる。実際に使用されていただんじりの部材や、町なかの建築など、生活や社会の中にある作品を鑑賞することで、生活や社会とのかかわりにおける鑑賞の視点を育むことができるだろう。

　だんじり彫り物の鑑賞を表現につなげる試みでは、鑑賞から着想を得て、自らイメージをひろげて表現することを目指した。だんじりの装飾は、浮き彫りの技法によるため、半立体の作品を作ることとした。時間や素材、参加者の年齢などの条件から、彫り物ではなく粘土を用いた。粘土という素材の特性、半立体ならではの面白さを考えて表現を行うことで、鑑賞と表現が循環することを期待した。

2-2. 活動のデザイン
先にあげた 5 つの場面を以下のような時間配分と道具立てでデザインした。

時間	活動内容	ツール
10:00 (40 分)	集合、名札付け、挨拶 〈出会う〉実物資料の鑑賞 だんじり彫り物の鑑賞とスケッチ	実物彫り物 鉛筆、紙、クリップボード
10:45 (40 分)	二条城へ移動 〈味わう 1〉町歩きによる鑑賞 二条城建築の立体装飾を鑑賞 自由鑑賞の後、各自で昼食	ワークシート 鉛筆、紙、クリップボード
14:00 (45 分) (20 分)	博物館に再集合 〈味わう 2〉 造形表現 粘土で立体装飾作り 休憩中に乾燥 色付け	粘土、フレーム、絵の具
(25 分) 		
15:30	〈共有する〉 参加者作品と資料を鑑賞する	
16:00	〈ふりかえる〉 活動全体のふりかえり	

2-3. 実際の活動とデザインの変更

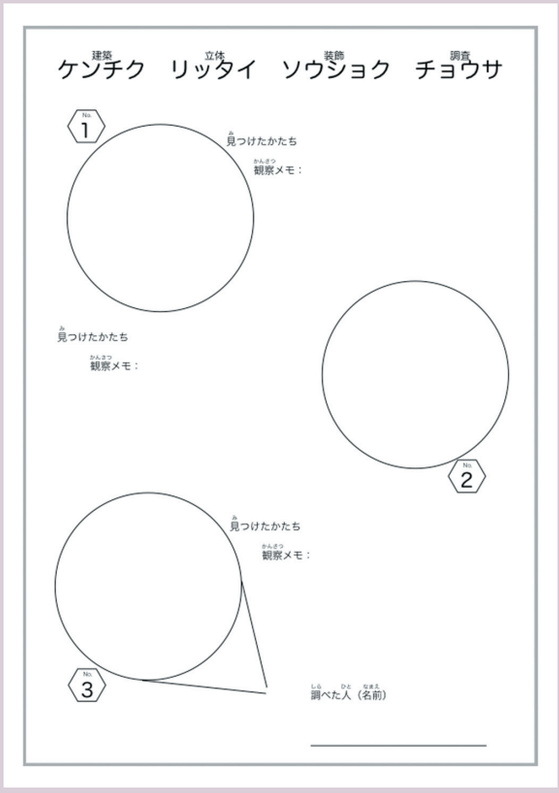
プレワークショップには、幼児〜小学校低学年 9 名が参加した。上記のように計画していた活動を参加者らの様子をみて変更しながら実施した。変更点は、1）だんじり彫り物の鑑賞の時間を大きく増やしたこと、2）昼食をとってから二条城へ向かいゆっくりと鑑賞を行ったこと、3）粘土作品への着色を省いたことである。

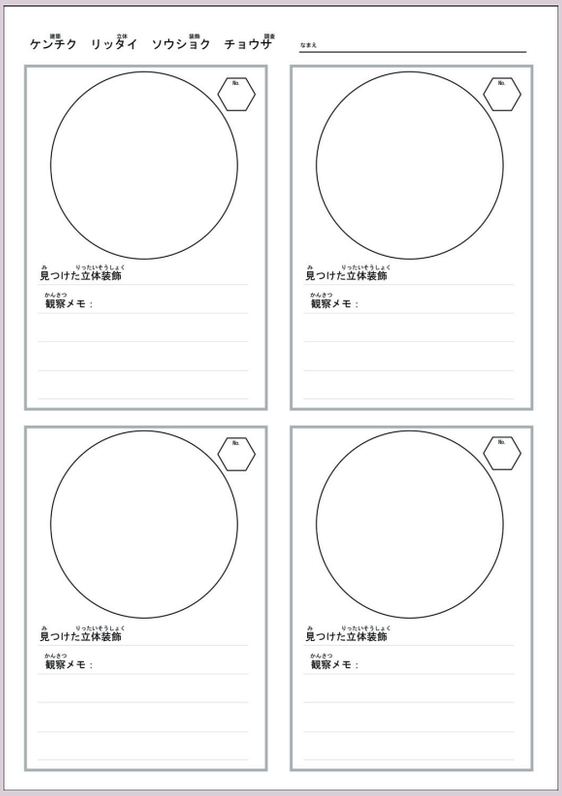
だんじり彫り物は、3 点それぞれを四方から鑑賞できるようにした。スタッフが子どもの間に入り、子どもらのつぶやきやおしゃべりをひろいながら、ときおり問いかけたりしながら鑑賞を進めた。全員がいずれか 1 点をじっくり見た後に、他の 2 点も鑑賞し、他の鑑賞者の発見を共有できるように全体への投げかけや注目をうながしたりもした。彫り物のモチーフが何なのかというやりとりや、どのような材料でどのようにして作られたのか、どこついていたのか、という視点での鑑賞がおこっていた。スケッチについては、完成を求めず、参加者各自の書きたい気持ちに応じて仕上げることとし、それよりは話をしながら鑑賞することに重きをおいた。予定では 40 分だったが、参加者の資料への積極的な態度を鑑みたことで、60 分以上を鑑賞についやすことになった。

二条城での立体装飾の鑑賞のためにはワークシートを用意した。装飾はいくつかのモチーフがまとまってひとつのシーンをあらわしているようなもの、またはなんらかの連続文様のものなどからなっている。ワークシートには、部分のスケッチと、そこにみつけた形と観察による気づきのメモ欄を設けた。参加者が興味に応じて作業量を増やせるように、また少ない取り組みでも完成が可能なように、1 枚目は 3 点、2 枚目以降は 4 点記入できるシートデザインにした。

モチーフをさがすことに参加者らは積極的で、それぞれが 2 枚以上のシートを完成させ、数名については何枚ものシートを仕上げた。みつけることが楽しく、スケッチはわりと簡易に描いて、たくさんの数をこなしている様子が多く見られた。参加者の保護者の中に建築史の専門家がいたので、モチーフの説明をしてもらったところ、子どもらの関心がぐっと増したように見受けられた。

続く立体的な作品づくりでは、ハガキサイズのフレームに紙粘土をはりつけて作品を完成させる。参加者の多くがここまでの鑑賞を受けたモチーフを採用しており、中心になんらかの動物を配置している作品が多かった。また周囲の文様としてうずまきが表現されているものが複数点あったのだが、これはだんじり彫り物にも二条城建築にもみられた、水や獅子の髪の意匠から着想されたのではないかと思われた。着色することを予定していたが、粘土の乾き具合、時間の制約、子どもらの様子から判断し、色づけ作業を省いた。作品鑑賞では、参加者ひとり一人に表現したものについて説明してもらった。





2-4. 考察

鑑賞時間が長くなったのは、スタッフや保護者が子どもらの中に入り、やりとりをしながら鑑賞したことによるところが大きいだろう。ひとりの参加者の気づきや疑問を他の参加者とわかちあえるように、大人がやりとりの支援を行っていた。

フィールドワークで参加者らは次々とモチーフを見つけていた。建築史を専門とする保護者から龍は水の神やその使いとされていたので水の文様が周囲に配されていることや、火事から建物を守るという願いから建築の装飾に登場することが多いなどのような、モチーフの意味についての話をきくことができた。子どもらは興味深く話をきいており、後の造形の際にそのことを表現に入れ込んでいる参加者もあった。

彫り物をじっくり鑑賞することができ、フィールドにおける鑑賞も熱心にとりくんでいたと言えるだろう。また、造形においても、それまでの経験がちりばめられた作品になっており、鑑賞と表現がつながっていたことがうかがえた。しかしながら、長丁場だったこともあり、造形の時間には疲れた様子もあった。造形表現については、日を変えて取り組むなど、時を改めて実施することでより深まりが期待できたと考える。

3. ワークショップ 2〈鑑賞を目的とした学校への旅〉

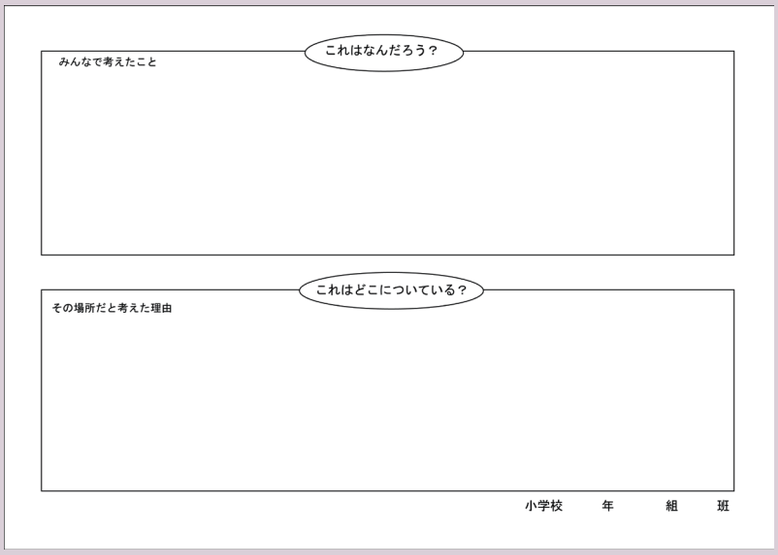
学校での実践は、45 分 1 コマで 5 年生を対象に 4 クラス同じ授業を行うことが条件だった。そこで、プレワークショップの経験をいかしつつ、だんじり彫り物の鑑賞のみに内容を絞り込んだ活動としてデザインすることとなった。テーマは、「これなに？これどこ？じっくり鑑賞だんじり彫り物」とした。プレワークショップのときは、鑑賞の視点をしぼらず、見る側にゆだねていたのだが、ここではモチーフが何を表現しており、その部材がだんじりのどこについているのかを考えるという視点を用意した。

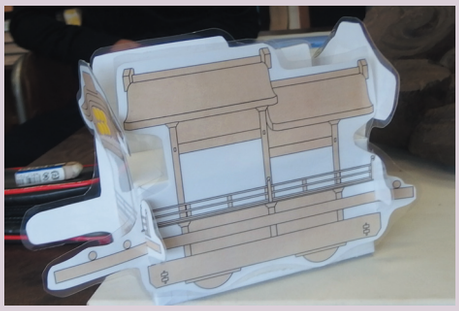
3-1. コンセプト（めあて）

だんじり彫り物を鑑賞する授業のめあては、「言語活動をともないながら造形作品をじっくり鑑賞する」とした。この活動を地域や生活の中に意味付けるために、授業のまとめからの発展として、「だんじりの彫り物をきっかけにして身近な神社仏閣建築に関心をよせる」こともめあてのひとつと考えて、教室での展示と授業をデザインした。また、「伝統的な彫り物の鑑賞を通して装飾について考える」ことも、日常にかえってからの視点としてなげかけたいと考えた。

3-2. 活動のデザイン（授業案）

プレワークショップはだんじり彫り物を用いた活動の可能性を探ることを意図していたので、参加者の数も少なく、活動のデザインもその場で適宜変えるなど、実験的な要素が強いものであった。しかし、学校での取り組みは、最初に教師らと授業内容を共有しておく必要があることや、4





クラスで活動内容に差がでないようにするために、実施内容や時間配分をかなり厳密に整理しておくことが求められる。そこで、活動の内容を分単位で配分した。

鑑賞を支援するツールとして、ワークシートとだんじりの簡易な模型とだんじりの様子を描いた近世の「摂津名所図会」を用意した。ワークシートには、鑑賞の視点として「これなんだろう？みんなで考えたこと」と「これはどこについている？その場所だと考えた理由」の 2 欄を設けた。模型はどこについているかを考えるために用い、各人がここだと思う場所に丸シールを貼ることとした。名所図会は、だんじりが使われている様子を伝えること、昔から使われているものだと実感することの支援にした。また、ふりかえりのためのワークシートも用意した。

		時間	活動内容	ツール
1	導入	3 分	活動の説明、スタッフ紹介	
2	鑑賞１	5 分	ひとりで１点の彫り物を鑑賞する。わかったこと、気づいたこと、不思議に思うことなどを３〜５つメモする。	実物彫り物 ワークシート
3	鑑賞２	11 分	グループで１点の彫り物を鑑賞する。一人で鑑賞した際の発見を共有しながら、この彫り物が何なのか、だんじりのどこについているのかを考える。	だんじり実測図 摂津名所図絵 A4 白紙 付箋
4	共有１	11 分	２グループでお互いの鑑賞についてわかちあう。それぞれの考えに意見しあいながら鑑賞をさらに深める。	
5	共有２	10 分	各グループの鑑賞を全体で報告し合う。	だんじり模型
6	まとめ	５分	彫り物とだんじりの解説、地域の神社仏閣にみられる彫り物の紹介。	スライド or 建築装飾カード
7	ふりかえり	時間外	鑑賞した内容のまとめと感想をまとめる。	ワークシート

3-3. 実際の活動とデザインの変更

こまかな時間配分を決めておいたが、回を重ねるごとに調整しながら改善を試みた。時間配分と変更は以下の通りである。

１回目は、導入において、だんじりなどについての既存知識の確認を挙手によって行った。これにかなり時間を割くこととなった。また、ひとりでの鑑賞時間を増やしてワークシートへの記入を求めた。このようなことから時間が不足した。導入に時間を割かずにすぐに鑑賞を行うことでも問題はないと考え、鑑賞時間の確保を優先した。また、グループ内での共有の後は、各人が教室内をまわることで他の資

〈単位：分〉

		予定	1 回	2 回	3、4 回	大まかな変更点
1	導入	3	10	3	1	１回目のみ既存の知識確認を行った
2	鑑賞１	5	10	5	9	
3	鑑賞２	11	10	8(6+2)	10(7+3)	2 回目以降は、（共有＋発表）として何なのかについて全体発表を入れた
4	共有１	11	10	12(4+8)	10(7+3)	どこに設置されているかをグループで話す 2 回目以降は、（共有＋発表）として全体発表を入れた
5	共有２	10	0	8	0	2回目のみふりかえりの発表を実施した
6	まとめ	5	5	9	10	２回目以降はまとめを長めにした

料を鑑賞したり、他グループの意見を聞いたりすることをイメージしていたが、自由な鑑賞ではそこまでのやりとりに発展しないことが見受けられたので、2回目以降はいくつかのグループに発表してもらうことにした。鑑賞2と共有1の8（6＋2）などは、グループ内でのやりとり6分と、数グループによる発表2分で合計8分をこの活動に割いたことを表している。

結果、1回目が試行となり、2回目の改善を経て、3回目におおまかな完成をみた時間配分をもとに、4回目はさらに問いかけなどにみがきをかけた。計画では、ひとりでの鑑賞を〈鑑賞1〉とし、グループでの鑑賞を〈鑑賞2〉として、それ以降に2グループでわかちあう〈共有1〉と学級全体で分かち合う〈共有2〉を設定していた。しかし、段階的に鑑賞することがいいのではないかとの考えで、摂津名所図絵やだんじり模型はグループ内での鑑賞が深まってから紹介するようにした。そのため、〈鑑賞2〉はモチーフが何かについてのグループ鑑賞で、〈共有1〉は彫り物がどこについているかを考えるグループ鑑賞となった。

また、1回目は、まとめの時間に彫り物の部材がだんじりのどこに設置されているのかの正解を紹介したのだが、2回目以降は授業時間内に正解を明かさないで、後で展示をみて各自で確かめてもらうよう促した。これは、正解を伝えたときのよろこびや落胆の様子から、設置場所の解説というよりもまるで鑑賞の答え合わせをしているかのような印象を与えるのではないかという危惧を持ったからである。

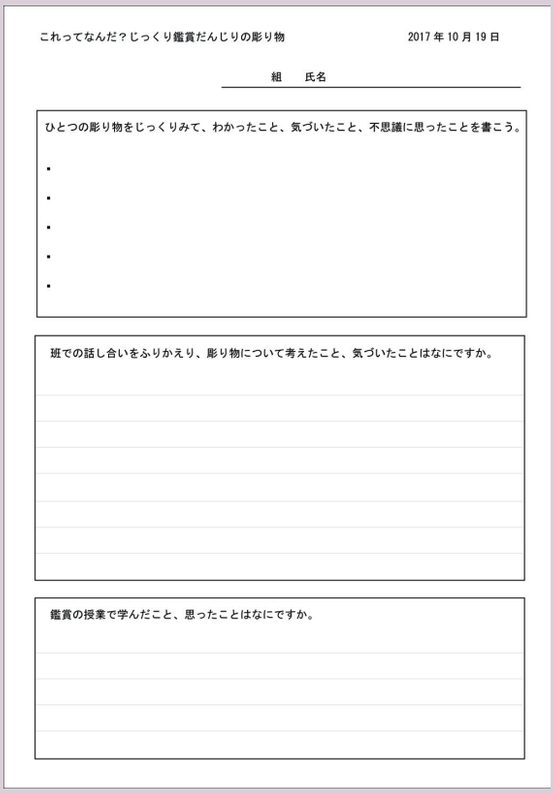
3-4. 生徒らのコメントと考察

ふりかえりのシートは3つの設問で構成した。まず、「ひとつの彫り物をじっくりみて、わかったこと気づいたこと、不思議に思ったことを書こう」との問いで、ひとりでみたことによる気づきをとどめてもらおうとした。続いて「班での話し合いをふりかえり、彫り物について考えたこと、気づいたことはなにですか」との問いにより共同でみることによる気づきをとどめてもらおうとした。最後の問い「鑑賞の授業で学んだ事、思ったことはなにですか」で、授業全体での学びを書き留めるようにした。

ひとつめの問いについては、ほとんどの生徒が箇条書きで外見的な様子にかんする気づきを列記していた。問いに「不思議に思ったこと」とあるが、それについて言及しているものは少なかった。

2つめの問いである共同による鑑賞からの気づきには、まとめの話で聞いた内容についてのものも含む授業全体の感想が多く含まれていた。2つめ3つめの問いの記述をまとめてみていこう。「細かいところをちゃんとしている」「難しいところもちゃんと彫っている」など彫刻から作業を慮るようなコメントがあった。また「今にも動き出しそう」「守り神のようでりりしい」「表現がきれい」など見た目の印象からのコメントもあった。

続いて、まとめの話を受けたことによるコメントを見ていこう。「いろいろな動物がまざりあわされた特別な生き物」「守り神のようなかっこいい物がついていたなんて」な



これってなんだ？じっくり鑑賞だんじりの彫り物　　2017 年 10 月 19 日

組　氏名

ひとつの彫り物をじっくりみて、わかったこと、気づいたこと、不思議に思ったことを書こう。

・
・
・
・
・

班での話し合いをふりかえり、彫り物について考えたこと、気づいたことはなにですか。

鑑賞の授業で学んだこと、思ったことはなにですか。

ど、モチーフについてのコメントがみられた。そして「いろいろな模様や動物をミックスすることでとてもいい作品になるんだなと思いました」「ふつうじゃない特別な感じを出す事ができる物だとわかりました」「小さい模様も大きい模様も意味があった。意味があるということがわかった」「とても考えてつくられている事がわかりました」「いろいろな気持ちが込められているんだなと思いました」と、モチーフの背景への理解を表すコメントも多く見られた。そして、だんじりについているということから「特別なところについていたりすることがわかりました」「神様は神社やお寺以外にもいるんだなと思いました」「日本だけじゃなく、世界のいろんなところに彫り物がある」という装飾の意味を広くとらえたコメントもみられた。

こうしてコメントをみていくと、授業のデザインに際してあげた 3 つのめあて、「言語活動をともないながら造形作品をじっくり鑑賞する」「だんじりの彫り物をきっかけにして身近な神社仏閣建築に関心をよせる」「伝統的な彫り物の鑑賞を通して装飾について考える」は達成できていると見受けられる。

しかしながら、課題も残されている。「すぐにこれはこま犬が表現されていると思って上のやつに書き込みました。次に班と話し合ってこれはなにか考えてくださいと言われて、もう何かわかっているからどうしようと思いました」とグループでのやりとりが行き詰まっていることを表すコメントがあった。彫り物の中に狛犬はない。こたえとして決めてしまったことで思考も議論も停止してしまったようだ。また、気づきやわかったことも、生徒らが対話を通して見いだしたことよりも、まとめの話を受けてのコメント、すなわち与えられた情報が多い。それは言葉として得た情報が言語化しやすいということもあるのかもしれない。モチーフが何かを考え、それがどこについているかを話し合うプロセスになっていたが、意味付けについては授業者が情報として与えるデザインになっていた。鑑賞資料にかんする知識が少ない生徒らがグループで議論するだけでは、鑑賞の深まりに限界があるのはたしかだが、情報を与えるタイミングを考慮することやグループの中に議論を支援するスタッフが入ることで、装飾の意味について考えて自分たちなりに意義を見いだすことができるかもしれない。

4. むすび：旅するミュージアムの道具立て

今回、学校での実践は、旅するミュージアムのスタッフが進行した。これからの活用では、教師が授業者となってすすめるケースもでてくるだろう。また、学校以外の場で活用においても同じことが想定される。そのため、実際に進行を行う人が、そのときのケースに応じて柔軟に変更することを前提としたゆるやかさを持ちながらも、ポイントがしぼられた基礎となるプログラムを用意しなくてはならない。そして、深めたり発展させたりすることについては、追加したりつけかえたりすることのできるオプションとして、目当てを明確にしつつ表現していくことが望まれるだ

ろう。

学校での実践からみえてきた課題は、生徒間の議論をどのようにして支援するかということとである。そこには意見をひろったり共有したりすることに加えて、情報をどのようにして提供するかという点もふくまれる。プレワークショップでは、スタッフや保護者が子どもの中に入っていたので、子どもらのコメントをひろったり、鑑賞の視点を共有したり、ちょっとした情報を伝えたりすることができた。しかし、学校への旅するミュージアムという限られた人材だけでは難しい。旅するミュージアムという制約から考えられるのは、資料に付加する情報のあり方と、その提供方法だろう。

今回の実践では、授業のためのしつらえとしてグループごとに彫り物資料を配置した。授業が終わってから、同じ教室を展示場としてのしつらえに変更した。展示場としてのしつらえでは、部屋の中央に彫り物をアイランド型に展示し、周囲の壁面にテキストや写真などだんじりについての情報を掲示した。また、建築の立体装飾について世界の事例を紹介するカードを見るためのすわることのできるコーナーを設置した。すなわち、授業は教室で資料を扱うものとしてしつらえ、博物館的な場は、授業とは別の時間に味わうことが前提になっていた。旅するミュージアムと題して博物館的な場をつくりだすことをめざしていたが、授業とミュージアムがうまくつながらないままデザインされていたという反省点がうかびあがってくる。この点を授業における情報提供と結びつけて企画することであらたな可能性がみえてくるのではないかと思われる。たとえば、情報ツールのかたちや内容の変更が考えられる。また、授業の進め方や場の使い方についても同様だろう。今回は、班ごとに資料が 1 点配置され、そこに座席が固定されており、自由にうごきまわることはほとんどなかった。

旅するミュージアムの場合、実践する場所ごとに空間の制約が異なり、しつらえをその都度考える必要がある。しかしながら、空間をどう作り上げるのか、どのような情報をどのように提供するのか、そこでは人がどう動くのかを時間ごと、進行場面ごとの変化を考慮しながら組み立てて行くことが必要で、今回の課題を活かした情報ツールの改善と追加を引き続き行う必要があるだろう。

旅するミュージアム空間でのやりとりが活性化される、すなわち鑑賞者が資料との関係を取り結ぶことのできる、よりひろがりをもった資料活用を目指してプロジェクトを継続させいたい。

最後に、授業の感想からいくつかを紹介する。「歴史にまったく気にしたり興味をもったことがなかったので、今日の授業で盛り物に興味を持てたのがよかったです」「もっと知りたいなぁと思いました」「歴史博物館の人がすごくわかりやすく教えていたのですごいと思います。ぼくもあんな人になろうと思いました」「日本にはこんな立派なものがあったんだと思いました」「鑑賞とはこういうことなんだなと思いました」「今日、ものすごく楽しいことをやりました」

市内小学校における実践

河島 明子
大東市立歴史民俗資料館

1. はじめに

市内の小学校においても展示とプログラムの実践を行った。対象としたのは、大東市立氷野小学校である。同校では、例年、第 3 学年の社会科で昭和のくらしと道具について学ぶ。展示は、学習する時期に合わせ、2018 年 1 月 23 日（火）～ 2 月 2 日（金）まで（9 日間）であった。展覧会名は「ちょっとむかしのくらしとまつり」とした。内容は、日常生活の道具、米作りや蓮根作りの農具、さらにその収穫を祈り、感謝する祭りとして、市内の秋祭りとだんじりの彫物を紹介するというストーリーである。

2. 展示の構成と仕様

会場となったのは、校内の「フリールーム」と呼ばれる教室である【写真 1、3】。ふだんは児童用の机と椅子が並び、学年問わず様々な目的で使用できるようにしているという。最小限の時間と人工を優先するため、大東市立歴史民俗資料館（以下、資料館）から展示台を運搬することはせず、この机を展示台として転用することにした。同じ高さの机を選んで並べ、ビニール紐で縛って動かないよう固定した。また、万が一、机がずれてしまったときに落下しないよう、小型の資料は複数の机に跨がないよう配置した。資料が机と同系色だったことから、急遽、黒色の模造紙を敷くことにした。今後も同じようなケースが想定されるため、黒いフェルトを貼ったスチレンボードを様々なサイズで備えておくなど、検討が必要である。

この実践において特徴と言えるのは、校内で収蔵する民俗資料も展示した点である。同校の資料室には、その周辺地域で使用されていた農具などが収められている。昨秋の第 5 学年の授業では、収穫した稲を、この資料室の足踏脱穀機や千歯扱きを使用して脱穀したと聞く。この資料室について事前に調査したうえで、踏車、手鋤、やぐらこたつの 3 点を運び出し、クリーニングを行ったうえで展示することにした。展示にあたっては、キャプションに同校が収蔵していることを明記した。

展示した資料は 21 点（同校資料室の 3 点を含む）であった。2 便に分けて搬入を行い、展示作業やクリーニングなどを合わせて計 5 時間程度を費やした（2 名）。3 時間程度の見込みを大幅に超えたのは、展示室の仕様を確認して判断する点（机の並びや縛り方など）が多すぎたからだろう。これをふまえ、いかに少ない打ち合わせで必要な情報を確認するか、その精度を高めていきたい。なお、搬出は 3 名で計 3 時間程度を要したことを補足しておく。

ハニカムボードで制作した屏風は、資料が並ぶ机の背面に、児童用の椅子で挟むようにして自立させた。また、部屋の中央には、机を島型に組み、来場した児童らが交流できるスペースを設けた。そこに「かんそうカード」を置くことで、展示室の経験を自由に表現できるようにした。また、黒板に掲示することもできるようにし、「かんそうカード」を通じて、互いの経験も交流できるようにした。

写真　1. 展示の様子

3. プログラムの実施

旅するミュージアム事業（以下、本事業）は、展示のみならず、ワークショップや展示解説など、プログラムを伴うことを重視している。今回は、展示期間中、1 クラスずつ展示室に招き、学芸員が 45 分間の授業を行った【写真 2】。授業は大きく 2 部構成である。前半は、ワークシートに取り組みながら、展示室を見学する。後半は、学芸員の解説である。

当初計画していた授業は、同学習に合わせた既存の出張授業プログラムをそのまま行うというものだった。しかし、展示室で行うという利点を生かし、既存の館内プログラムを応用することにした。既存の館内プログラムとは、資料館で例年 1 月～ 3 月に開催する「ちょっとむかしのくらし」展に、授業の一貫で来館する学校向けに行うものだ。展覧会の内容に合わせたワークシートを作成し、取り組んだ後、解説を行っている。氷野小学校では、ワークシートを展示物に合わせて改めて作成した。また、資料館で同様の展示を行っているため、同校で展示できなかった資料（黒電話、安全こたつ）を一時的に運び出した。さらに、人が介する効果的なプログラムとするために、授業時間内に限り、学芸員の立ち会いのもと、資料の一部（洗濯板、黒電話）に触れられるようにした。黒電話は、ワークシートに取り組む時間に、少人数ずつ交代で、全員が体験できるようにした。

授業中、児童たちはワークシートに積極的に取り組んでいた。ワークシートの設問は、解説を聞く前に予想を立てることを重視していたため、難易度は低い。例えば、「安全こたつがなんで安全か考えたら○（丸）をしよう」では、まず多数の道具のなかでどれが「安全こたつ」か認識し、道具のかたちを観察したり、キャプションの情報から、自分なりの想像をふくらませてもらうことがねらいである。決して、「予想が合っていたら○をしよう」ではない。授業後半の解説で、学芸員から安全こたつの仕組みを聞き、実演したときに、「そうだったのか」「なるほど」「意外だ」「なんで」という驚きが生じるよう工夫した。なお、ワークシートには 9 つの設問があったが、展示されている資料をできるだけ関連づけ、全体を解説するようにした。

4. 成果と課題

搬出時、学年の教員にヒアリングを行った。授業後、教員が児童に展示室の案内役を呼びかけたところ、20 分間の休憩中、何人かが展示室に立ち、授業の経験や解説で聞き知ったことを、他の学年の児童へ伝えていたという。実際に、展示室には数人の 3 年生が、道具の使い方を伝えたりするシーンが見られたという。およそ 50 人もの児童が展示室に集まる時間もあったそうだ。展示物そのものの理解だけでなく、資料を介した他者との交流という点でも、博物館らしいアウトリーチができたと言えるだろう。

また、黒板にはあふれんばかりに「かんそうシート」が掲示されていた（計 72 枚）【写真 4】。「三年がおしえてくれてたのしかったです。」という記述もみられた。さらに、「ふ

2

写真　2. 授業の様子 /3. フリールーム入口 /4.「かんそうシート」の掲示

み車は、上をふんで動かすと書いてあってびっくりしました。」「せんたく板をつかってみたいと思いました。なぜならよごれがどれだけとれるのかやってみたいからです。」というものもあり、さらなる興味を引き出すきっかけにもなったようだ。展覧会自体は、自然が身近な時代の暮らしを想うことをねらいとしたが、道具に興味を持ち、深く調べてみたいという意見もあった。彫物についての記述もある。「だんじりのやねがきょうみがありました。…（中略）…木でできていて、きれいに、ていねいにけずっていたところが気づきました。」というように、間近で見られたからこそ生じた気づきを記している。

3

5. まとめ

最後に、本事業のような実験的な取り組みを受け入れていただいた、大東市立氷野小学校長の渡部直実氏はじめ、教頭の松本光氏、度重なる打合せにお付き合いいただいた第 3 学年担当教員の河盛圭佑氏、今吉有貴氏、平野朱音氏に、改めて感謝の意を表したい。同校が、蓮根作りの授業をはじめ、資料館と度々授業を行ってきた経緯もあり、博物館の機能や利用方法を理解していたからこそ、実現できたと考えている。そうではないケースを前提にして、少しずつこの取り組みを重ねるしか、継続して博物館を届けていく方法はないだろう。

4

多様な参加者を対象とした「旅するミュージアム」の実践について

武井 二葉
大東市立歴史民俗資料館

1. はじめに

「旅するミュージアム」の旅先として、高齢者や障がい者、近くに文化財と接する機会が少ない学校など来館や文化財に対するアクセスに制約があるところを想定している。しかし、制約はそれだけに留まらないのではないだろうか。例えば、休日の過ごし方として、全国どこにでもあり、しかも何となく同じようなものが並んでいるという印象の小規模館を選択する人がどれくらいいるだろうか。歴史民俗資料館は、市域に一つはあり、誰もが利用できる施設でありながら、アクセスすることに心理的な制約が大きい。そこで、ショッピングモールや催事など「歴史民俗資料館」に興味がない人のところへ出かけていく必要があると考え、そのツールを検討することとした。

2. 事業内容

1 回目の検討は、2017 年 8 月 23 日に大東市産業振興課の主催する「第 2 回市内「企業＆施設」探検ツアー「ものづくりの今と昔を学ぼう！！」という事業のなかで実施した。明星金属工業株式会社ならびに同社上田幸司氏、阪本節治氏の協力を得つつ、だんじり資料を鑑賞するためのキットを使用し、筆者が実践を行った。

2 回目の検討として、2018 年 2 月 17 日に「なつかしくてあたらしい　ちょっとむかしのくらし」関連事業として「れきみんカーニバル with 小さいとこネット」というイベントの中で実施した。だんじり資料をよりよく鑑賞するためのプログラムとして、河島明子により企画され、市民学芸員の協力のもと実施した。

またこれと並行して、導入部で使用する絵本の制作を行った。

（1）「第 2 回市内「企業＆施設」探検ツアー「ものづくりの今と昔を学ぼう！！」」
日　時：2017 年 8 月 23 日（水）13:30 〜 16:00
内　容：①明星金属工業工業株式会社見学
ものづくりの今を学ぶために、上田氏の案内のもと、自動車金型のメーカーで工場見学や手づくり 3D プリンターの見学を行った。
②歴史民俗資料館見学
ものづくりの昔を学ぶために、収蔵庫内で金属でできたものを探した。その後、鋳造と鍛造という二つの製法の違いを説明した。
③ものづくり体験
阪本氏が講師となり、型をつかってだんじりの彫り物のレプリカを作成した。館内のレプリカ資料他、だんじりの彫り物を展示することで、自分がつくったものの出来栄えを観察した。

（2）「れきみんカーニバル with 小さいとこネット」
日　時：2018 年 2 月 17 日（土）13:30 〜 16:00
内　容：随時の参加で実施した。

写真　1.「ものづくりの今と昔を学ぼう！！」ものづくり体験 (参加者)
2.「ものづくりの今と昔を学ぼう！！」資料館見学 /3.「ものづくりの今と昔を学ぼう！！」ものづくり体験（会場）

だんじりの彫り物の写真から起こしたトレース図をプラバンに印刷したものを「龍」「獅子」など 4 種類用意した。
・参加者は、好きな絵柄を選び、マジックで彩色していく。
・彩色後、パンチ穴を上部にあけてから、オーブントースターで焼く
・熱による収縮・硬化後、ストラップをつけて完成。

（3）絵本の制作

導入部で使用する絵本は、ワークショップ等の経験を持つ水野希絵氏に制作を依頼した。水野氏には、佐藤優香氏による京都文化博物館でのワークショップにも参加し、必要な要素を検討していただいた。その後、水野氏から、だんじりに馴染みがない者を対象とした場合、資料に親しみを感じてもらう必要があり、彫り物を主人公とした物語「ぼくのことしってる？」を提案していただいた。
提案いただいたものを、12 月の介助犬のひろばにおける実践で試行してみたところ、ページ数が多いこと、それに比して詞書が少ないことが課題としてあがった。これを絵本や紙芝居として利用した場合、一場面に文字・絵による情報量が少ないため、パラパラとページをめくることになり、かなり慌ただしい印象となった。

そこで、絵巻物形式にして右から左への画面展開へと切り替えることにした。徐々に画面が遷移していくことで慌ただしさの解消を図った。

写真　4.「れきみんカーニバル」だんじりプラバンづくり (会場)

3. おわりに

当初は、絵本とキットを組み合わせて、ショッピングモールや催事において実践をする予定であったが、検証と制作に時間がかかり今年度実施することは叶わなかった。しかしながら、2 つの実践とキットの開発により、下記の通りプログラムの企画をまとめることができた。ここにその内容を記し、まとめにかえることとする。

タイトル：150 年前のくらしとまつり
展　　示：150 年前の大東市のくらしに関わる民俗資料、文献資料と同時代につくられただんじりの彫り物と関連資料の展示

公開事業①未就学児〜小学校低学年向け
（目　的）資料がだんじりの彫り物だということを理解し、彫り物がつく位置や意味について思いをめぐらせる。⇒装飾の位置や意味を考える。
（導　入）だんじり絵本「ぼくのこと知ってる？」
自分が何であり、どこから来たのかわからない「ぼく」が、実はだんじりの彫り物であったということを紹介。
（展　開）彫り物鑑賞
だんじりの彫り物を見ながら、どのように見えるか、何か気づいたことがあるかなど対話をしながら鑑賞する。
（発　展）制作と鑑賞
型でだんじりの彫り物をつくり、だんじりのどの部分の彫り物であるかを牛乳パックで作った模型を使い、各自で考える。
（まとめ）鑑賞
できた模型をみながら、その場所につけた理由などを説明する。

公開事業②小学校低学年〜小学校中学年向け
（目　的）資料がだんじりの彫り物だということを理解し、同じ彫り物でも制作者や時代などによって表現が異なることに気づく。⇒装飾の表現方法の違いを知る。
（導　入）だんじり絵本「ぼくのこと知ってる？」
自分が何であり、どこから来たのかわからない「ぼく」が、実はだんじりの彫り物であったということを紹介。
（展　開）彫り物鑑賞
だんじりの彫り物を見ながら、どのように見えるか、何か気づいたことがあるかなど対話をしながら鑑賞する。
（発　展）制作と鑑賞
彫り物の様子を観察しながら、プラバンに着色する。
（まとめ）2 台のだんじりの彫り物の違いなどを説明する。

写真　5.「れきみんカーニバル」だんじりプラバンづくり（参加者）/6. だんじり絵巻「ぼくのこと知ってる？」

第3部　展示

よみがえれ！
だんじりの龍
2018.1/9 tue〜2/28 wed
わたしは誰だ？
どこから来たのだ？
はじめに

第３部　第１章

大東市立歴史民俗資料館での「TATSUMA －くらしとまつり－」展示について

期間：2017 年 10 月 1 日（日）～ 12 月 3 日（日）　開館日数合計 60 日
場所：大東市立歴史民俗資料館　３階企画展示室

森井 綾乃
大東市立歴史民俗資料館

■内容

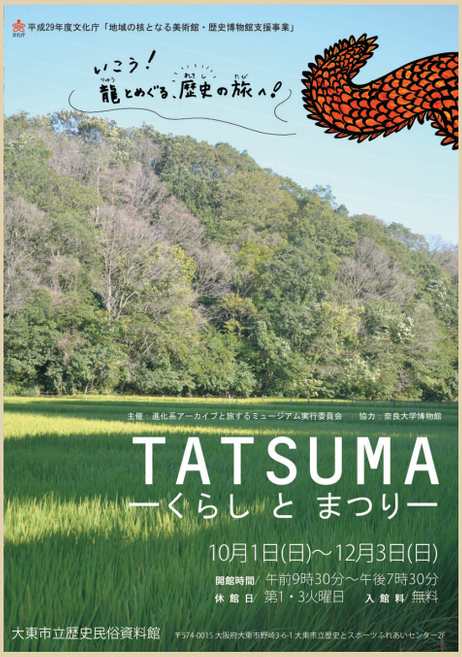
今年度、進化系アーカイブと旅するミュージアム事業では、2015 年 11 月に解体された、大東市龍間（経寺地区）のだんじりの彫り物や幕などといった付属品や、古文書を中心に、保存と活用の取り組みを行っている。資料を収蔵するにあたり、クリーニングや写真撮影、番号の付与といった、登録に至るまでのさまざまな作業を、当館の専門スタッフである市民学芸員や、外部の有識者による協力を得て進めている。こうした保存にまつわる取り組みを進めると同時に、資料の価値を広く伝えるため、病院・学校・高齢者施設などといった場所へアウトリーチを行うなど、地元企業や外部有識者の協力も得て、さまざまな活用方法を試みている。　本展では、事業で進めてきた取り組みを紹介するとともに、だんじりの彫物や古文書から知ることの出来る龍間の「まつり」と、当館で保管している石材業に関する民俗資料や、龍間に現存する石造物や寺社の歴史から見えてくる、だんじりが曳行していた村の「くらし」を紹介し、龍間という地域をさまざまな視点から紹介した。

■展示

第一章「古文書をひもとく」では、だんじりと共に預かった古文書の紹介や、目録の作成と翻刻作業などを行っている、市民学芸員の活動を紹介した。第二章「だんじりの彫物・幕」では、だんじりの彫り物や幕を収蔵するにあたって、市民学芸員や奈良大学の専門家から協力を得て進めている保存処理や、デジタル・アーカイブ化など、資料の活用に向けた保管活動という視点からだんじりや幕を紹介した。第三章「だんじりのあった村」では、龍間に現存する石造物や寺社などといった文化財にまつわる龍間の歴史と、当館で収蔵している石材業の民俗資料などを紹介し、だんじりを曳行していた村の人々が営んできた「くらし」に焦点を当てた展示を行った。また、「旅するミュージアム」として館外で試行したさまざまなアウトリーチ活動についての紹介も行った。

第三章展示室で龍間を紹介するために制作した、龍間に飛んで行った龍のしっぽに導かれて龍間の文化財を巡る、というストーリーの映像に用いた、彫物の龍のしっぽをモチーフとしたイラストを、紹介パネルや展示室・チラシなど全体のデザインに使用した。

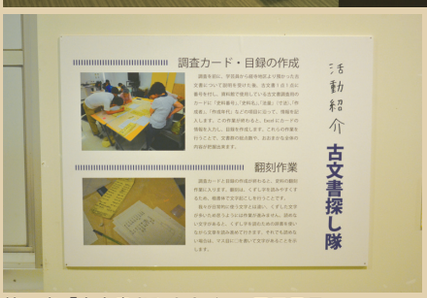
展示の導入として、資料館で龍間（経寺地区）のだんじりにまつわる資料が保管されるようになったきっかけである、だんじりが解体されて彫物が資料館へやってくるといったストーリーのアニメーションによる導入映像を、展覧会場である 3F へ続く 2F 階段の手前に設置した。また、2F と 3F との間に位置する中二階に、龍間から見下ろした大東市の写真を設置し、3F 階段踊り場に龍間の風景写真を設置することで、資料館から龍間へ山を登って行くように、来館者に龍間（＝展示室）へ向かっていくような感覚を体験してもらうことを狙いとした空間作りを行った。



チラシ表面（A3 二つ折り　外側）

チラシ裏面（A3 二つ折り　外側）

チラシ中面（A3 二つ折り　内側）　資料館から龍間までの地図。文化財の位置を示した。



第一章「古文書をひもとく」 展示風景

第二章「だんじりの彫物・幕」 展示風景

第三章「だんじりのあった村」展示室

1.2F 階段手前の導入映像 /2. 展覧会場廊下 /3. 中二階に設置した大東市内写真 /4.3F 階段踊り場に設置した龍間の写真

第３部　第２章

奈良大学博物館での「よみがえれ！だんじりの龍」展示について

期間：2018 年 1 月 9 日（火）～ 2 月 28 日（水）　開館日数合計 42 日
場所：奈良大学博物館　入口前コミュニケーションロビー

■内容

大東市龍間で曳行していた明治時代初めのだんじりが解体されることになった。大東市立歴史民俗資料館では市民学芸員や地元企業とともに、クリーニングや殺虫などの保存処理、資料の調査やデータベースの構築、資料館での展示や館外での資料活用を行っていった。奈良大学博物館と奈良大学の専門家は、これまで保存処理やデータベースの構築といった高度な専門知を提供することで、これらの事業に協力をしてきた。本展ではこれらの事業で行ってきた取り組みを、解体されただんじりがさまざまな人びとの協力のもとよみがえり、館外へ旅立つというストーリーに仕立て、パネルで紹介をした。

■展示

文化財が収蔵され、館外で活用されるまでの経緯を「モノ」を中心としたストーリーとしてまとめ、絵巻状の大画面で説明した。その下に、どのような工程でどのような人がかかわったのかという「人」を中心とした注釈を加えた。物語の最後には、今回の主人公であった「龍の彫り物」の実物資料 1 点を展示し、パネル展示のなかでインパクトを与えた。

また、展示全体のアイキャッチとして、もりや産業株式会社の協力を得て、紙管をジョイントでつないだゲートを作成した。正面にはだんじりが解体される直前の写真を配し、右には昭和初期の同だんじりの古写真と龍間のだんじりの解説、左には現在のだんじり曳行の写真とだんじりの解説を付した。

平成29年度 文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業
文化庁
パネル
予告展示
よみがえれ！
だんじりの龍
2018.1/9 tue〜2/28 wed
主催/ 進化系アーカイブと旅するミュージアム実行委員会
(奈良大学博物館・大東市教育委員会・大東市立歴史民俗資料館・大東市立歴史民俗資料館市民学芸員連絡会)
写真：解体される大東市龍間のだんじり（2015.11.7）
開館時間 平日/ 9:00〜16:30 土曜日/ 9:00〜12:00
休館日 1/12(金),13(土),14(日),21(日),25(木),2/4(日),5(月),6(火),12(月)
入館料 無料
会場 奈良大学博物館入口前コミュニケーションロビー
〒631-8502 奈良県奈良市山陵町1500
奈良大学博物館
NARA UNIVERSITY MUSEUM
TEL/ 0742-44-1251 FAX/ 0742-41-0650 URL/ http://www.nara-u.ac.jp/museum/
奈良大学

チラシ表面

奈良大学博物館
よみがえれ！
だんじりの龍
パネル
予告展示
奈良から生駒山を越えると大東市龍間とよばれる集落があります。その龍間で曳行していた明治時代初め、150年程前のだんじりが解体されることになりました。大東市立歴史民俗資料館では市民学芸員や地元企業とともに、クリーニングや殺虫などの保存処理、資料の調査やデータベースの構築、資料館での展示や館外での出張展示や出前授業を行っていくことになりました。ここにだんじりの彫り物である「龍」がよみがえり、館外に飛び出します。「旅するだんじりの龍」のはじまりです。
奈良大学博物館と奈良大学の専門家は、これまで保存処理やデータベースの構築といった高度な専門知を提供することで、これらの事業に協力をしています。2018年7・8月には、奈良大学博物館でその企画展を開催しますが、それに先立ち、本展ではこれらの事業で行ってきた取り組みについてパネルで紹介をするものです。
上：だんじりがあった住吉神社
下：クリーニングされた龍の彫物
▲資料の収集(解体されただんじりから彫物を収集する学芸員)
「よみがえれ！だんじりの龍」本編展示 のお知らせ
予告展示で紹介した「だんじりの龍」の物語。本編展示では
実物資料や映像を交えながら、だんじりの龍が再生していく
過程をご覧いただきます！
日程 2018年7月〜8月
場所 奈良大学博物館
詳しくは、奈良大学博物館HPでチェック！
http://www.nara-u.ac.jp/museum/
▲参考写真
2017年「TATSUMA-くらしとまつり-」展示（大東市立歴史民俗資料館）
問合せ＝進化系アーカイブと旅するミュージアム実行委員会
大阪府大東市野崎3-6-1大東市立歴史とスポーツふれあいセンター2F大東市立歴史民俗資料館
072-876-7011

チラシ裏面

弐
どの部材も
ほこりまみれ。
ほこりをはらったら、
黒雲がでてきた。

五
わたしは資料館を飛びだし、
旅にでる。
高齢者施設や学校へ。
四
たくさんの部材を
記録していく。
写真をとったり、計測したり。

絵巻状の大画面

壱。
一緒にあった箱を開けたら、
幕が入っていた。
風雲の幕。
唐獅子牡丹の幕。

零。
わたしは誰だ？
どこから来たのだ？

参。
同じく、古文書の
入った箱があった。
戦闘意志田のつくった記録。

進化系アーカイブ

まとめ

1. 進化系アーカイブ

①だんじりの彫物の収蔵から整理まで

大東市龍間（経寺）のだんじりや幕・太鼓・古文書などの資料を保管・収蔵することになった。まずは、資料 136 点のクリーニングを行い、その時の観察によって文化財害虫による食害が発生していたため、高濃度の二酸化炭素による殺虫処理を実施した。

市民学芸員とともに資料の収蔵について学ぶ必要があったため、滋賀県立琵琶湖博物館、国立民族学博物館、久多いきいきセンター、西宮市立郷土資料館の収蔵庫見学を行った。また、専門的な視点から収蔵庫調査を行うため、外部有識者とともに、大韓民国国立中央博物館、同国立全州博物館、同国立民俗博物館、砺波民具展示室、北海道博物館、小樽市総合博物館、瀬戸内町立図書館・郷土館、奄美市立奄美博物館を訪れ、館員から現状と課題について詳しい説明を受けた。

②だんじりの文献史料の整理とアーカイブ化

まずは、市民学芸員とともに彫り物とともに受け入れた龍間経寺地区の史料 74 点について翻刻作業を行い、その後、出品する史料 12 点について展示に向けた解説文を作成した。展示終了後、アーカイブ化に向けて、史料全点について写真撮影を実施した。

また、市民による蔵書の修復作業を行っている西尾市立岩瀬文庫と、今後のアーカイブの運用方法や史料公開の参考とするため山口県文書館への視察を行った。

③博物館資料のアーカイブシステムについて

市民も参加できる低コストで新しいデジタル・アーカイブの構築とその手法を実践した。その結果、低コストでの体系化に成功し、斬新なライティング技術を導入したことで理想的な構築に近づいた。さらに、前提とする知識や技術がなくても参加できる手法を実現できたことがあげられる。

2. 旅するミュージアム

①だんじり資料を活用していくために

「旅するミュージアム」では、デジタル・アーカイブ化した「だんじり資料」を活用するためのキット開発と、教育普及プログラムの開発を行った。

この事業は、博物館の存在を認識していない方や、交通事情などによって来館できない方たちのために、博物館を届けることを目標に始まった。すでに、全国の博物館では、様々な取り組みが行われており、その事例調査を行うことによって、課題や特徴を整理することにした。調査対象としたのは、岐阜県美術館で、展示ユニットという視点から「ナンヤローネプロジェクト」、アウトリーチという点から「スクールミュージアム」について多くを学んだ。またアウトリーチについては、大分県立美術館において、ワークショップの視察を行うとともに、教育普及グループ主幹学芸員榎本寿紀から離島などで行われたアウトリーチプログラムなどについてご教示いただいた。

その上で、市民学芸員と制作を行ったのは、アウトリーチに使用する屏風とその

台座である。伝統的であること、単体で自立できること、市民学芸員が当事者として関わりやすいことを理由に、ハニカムボードを屏風の構造にした展示具を制作した。

②だんじり資料を活用した公開事業

教育プログラムの開発においては、文化財と接する機会が少ない場合やアクセスに制約がある方を対象に、高齢者施設や学校などにおける実践を行った。

高齢者施設としては、8 月 7 日～ 18 日に、有料老人ホーム野崎苑において「ちょっとむかしのくらしとまつり」の展示と、関連イベントとして「きいて・さわって、ちょっとむかしのくらしとまつり」を開催した。

また、8 月 23 日には、大東市産業振興課主催の「第 2 回市内企業＆施設探検ツアー ものづくりの今と昔を学ぼう」の中で、だんじり彫物の 3D プリンターキットを使用して実践を行った。さらに、12 月 3 日には、「介助犬のひろば」イベントの中で「旅するミュージアム」を車イスや聴覚障がいの方を対象に実施した。

7 月 28 日の京都文化博物館でのプレワークショップ実施、それを小学校向けのプログラムへと改良を行った後、10 月 19 日に神戸市立鹿の子台小学校において実践を行った。

2018 年 1 月 23 日～ 2 月 2 日には、大東市内の氷野小学校でも、「ちょっとむかしのくらしとまつり」を紹介する展示と教育プログラムの実践を行った。

同年 2 月 17 日に、大東市立歴史民俗資料館で行われたイベント「れきみんカーニバル」にも出展し、不特定多数を対象にしたプログラムとして、だんじりの彫り物の写真から起こしたトレース図用いたプラバンづくりを行った。

3. 展示

①大東市立歴史民俗資料館「TATSUMA―くらしとまつり―」

10 月 1 日～ 12 月 3 日に行われた展示では、事業の取り組みに触れ、だんじりの彫物や古文書からわかること、また、地域の産業であった石材業に関する資料や、現地にある石造物や寺社からみえる村のくらしなど、龍間の地域について紹介した。

②奈良大学博物館「よみがえれ！だんじりの龍」

2018 年 1 月 9 日～ 2 月 28 日の展示では、これまでの経過を示すとともに、大学及び博物館の専門家が、保存処理やデータベースの構築に関わった内容を紹介した。

4. 総括

奈良大学博物館の専門性と、大東市立歴史民俗資料館の地域性を活かし、市民学芸員とともにデジタル・アーカイブ「進化系アーカイブ」と、その活用方法としてのモバイルミュージアム「旅するミュージアム」を構築した。さらに、企業と連携してキットを開発して高齢者施設などでの実証実験も行い、学校に向けての教育普及プログラムも実践した。そして、これらの成果の公開としての展示も行った。今後、この事業で明らかになった課題の解明が求められる。

旅するミュージアム

平成 30 年 3 月 31 日
笠井敏光

< 謝辞 >
本事業の実施にあたり、下記の方々よりご協力を賜りました。記してお礼申し上げます。

機関・組織・個人（五十音順・敬称略）
奄美市立奄美博物館、医療法人徳洲会野崎苑、大分県立美術館、小樽市総合博物館、
介助犬のひろば実行委員会、川村義肢株式会社、岐阜県美術館、
京都市文化財保護課、京都造形芸術大学、京都府京都文化博物館、久多自治振興会、
公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会、神戸市立鹿の子台小学校、国立民族学博物館、
残念石研究会、滋賀県立琵琶湖博物館、瀬戸内町立図書館・郷土館、
大韓民国国立全州博物館、大韓民国国立中央博物館、大韓民国国立民俗博物館、
大東市教育委員会、大東市産業振興課、大東市立氷野小学校、龍間自治会、
砺波市立砺波郷土資料館、奈良大学、西尾市岩瀬文庫、西尾市教育委員会文化振興課、
西宮市立郷土資料館、原野農芸博物館、北海道博物館、明星金属工業株式会社、
もりや産業株式会社、山口県文書館、

青木滉太、安達志帆、安達漠、石川直章、石橋博壽、今村栞、今吉有貴、上田幸司、
植田琢也、魚島純一、元今玉、榎本寿紀、圓谷昂史、大井理恵、岡田芳治、岡村喜史、甲斐晴菜、
權赫山、權善榮、金谷匡人、神尾愛子、川人未来、河盛圭佑、北村彰、金恩榮、金承熙、金炯周、
小関万緒、剣持悟、齊藤恵子、佐々木麻衣、佐藤優香、阪本節治、菅原慶郎、
清彩華、高原徹、伊達仁美、崔興鮮、中川あや、中谷たづ子、西谷美紀、西田紀子、
西尾嘉美、西澤昌樹、野上智美、野澤知子、能崎たき子、朴眞美、原野耕三、久伸博、
俵谷和子、平野朱音、堀岡奈央、堀内保彦、福井清治、福原凡香、福持昌之、福本謹一、
町健次郎、松本光、百瀬さくら、水島未記、水野希絵、三桝友梨香、宮元正博、村上力磨、
村瀬範弘、村野正景、八十島将充、山際秀紀、山本千都、横山桃子、李聖子、李永範、
渡部圭一、渡部直実、

市民学芸員
≪古文書探し隊≫
氏原稔夫、大藪庸子、岡島怜子、加茂伸子、北野武司、栗山登志子、黒川喜和子、桒原妙子、
田里孝子、為則照子、為則泰明、中下志津子、中村義之、林田恵子、檜垣一美、平尾和久、
平尾寿美子、前田喜久子、前田幸子、水永八十生、和久田隆夫
≪だんじり整理隊≫
石田薫、磯脇清美、礒脇晃一、伊藤忠男、伊藤幸美、氏原稔夫、大薗美貴子、柿木薫、
栗山登志子、小泊繁美、竹元智子、冨増由起子、中西昭治、中村義之、服部悦子、檜垣一美、
平尾和久、平尾寿美子、広田美和、前田幸子、松田薫、和久田隆夫

本事業は文化庁「平成 29 年度文化芸術振興費補助金 (地域の核となる美術館・博物館支援事業)」を得て、実施したものです。

文化庁平成 29 年度　地域の核となる美術館・博物館支援事業
進化系アーカイブと旅するミュージアム　平成 29 年度事業報告書

発行日：平成 30 年 3 月 31 日
発行：進化系アーカイブと旅するミュージアム実行委員会
事務局：大東市立歴史民俗資料館
〒 574-0015　大阪府大東市野崎 3-6-1
電話　072-876-7011